

911.158
R97
2



始



1-3517

~~37735~~



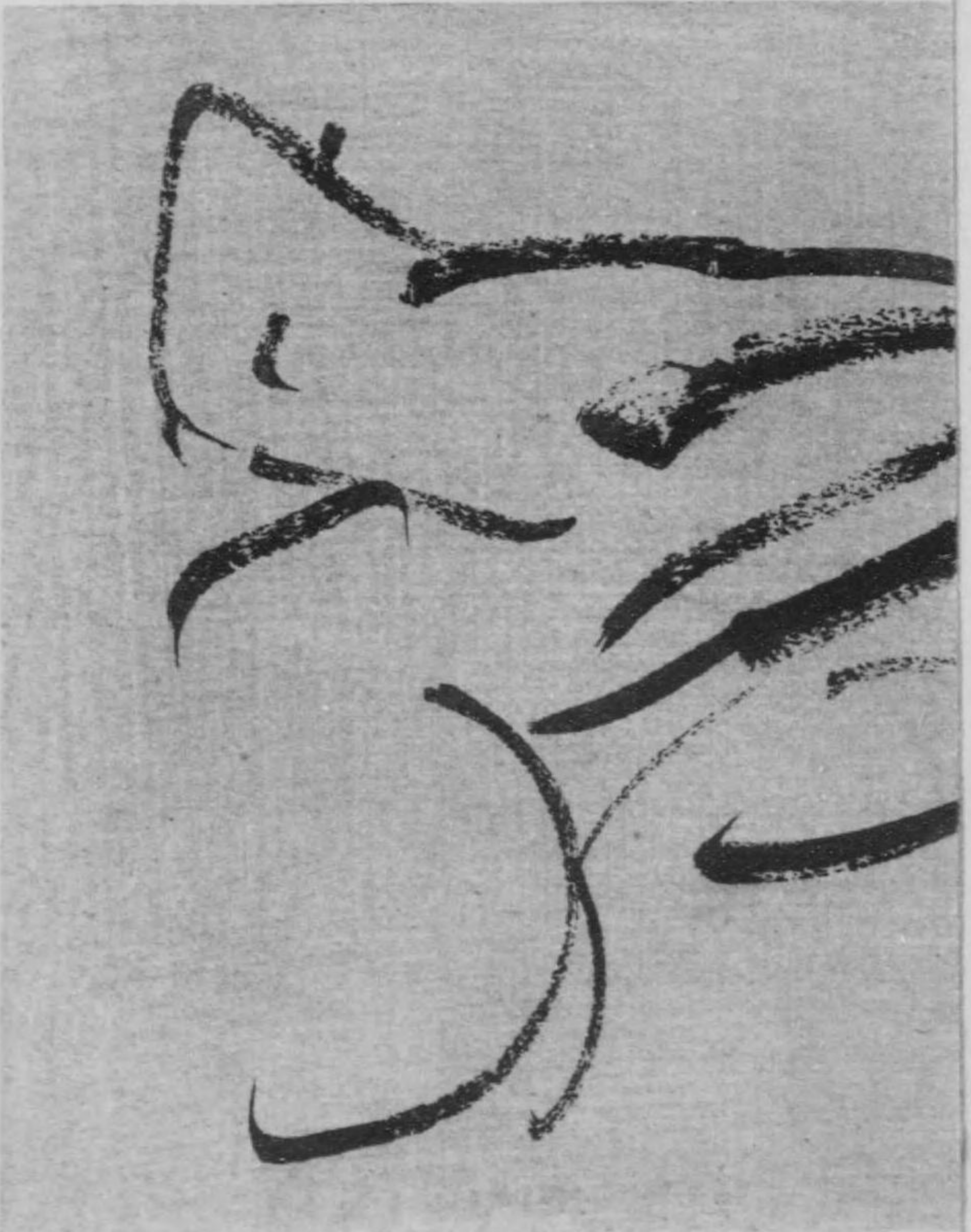
911.158  
R97  
2

相馬御風編

良寛和尚詩歌集

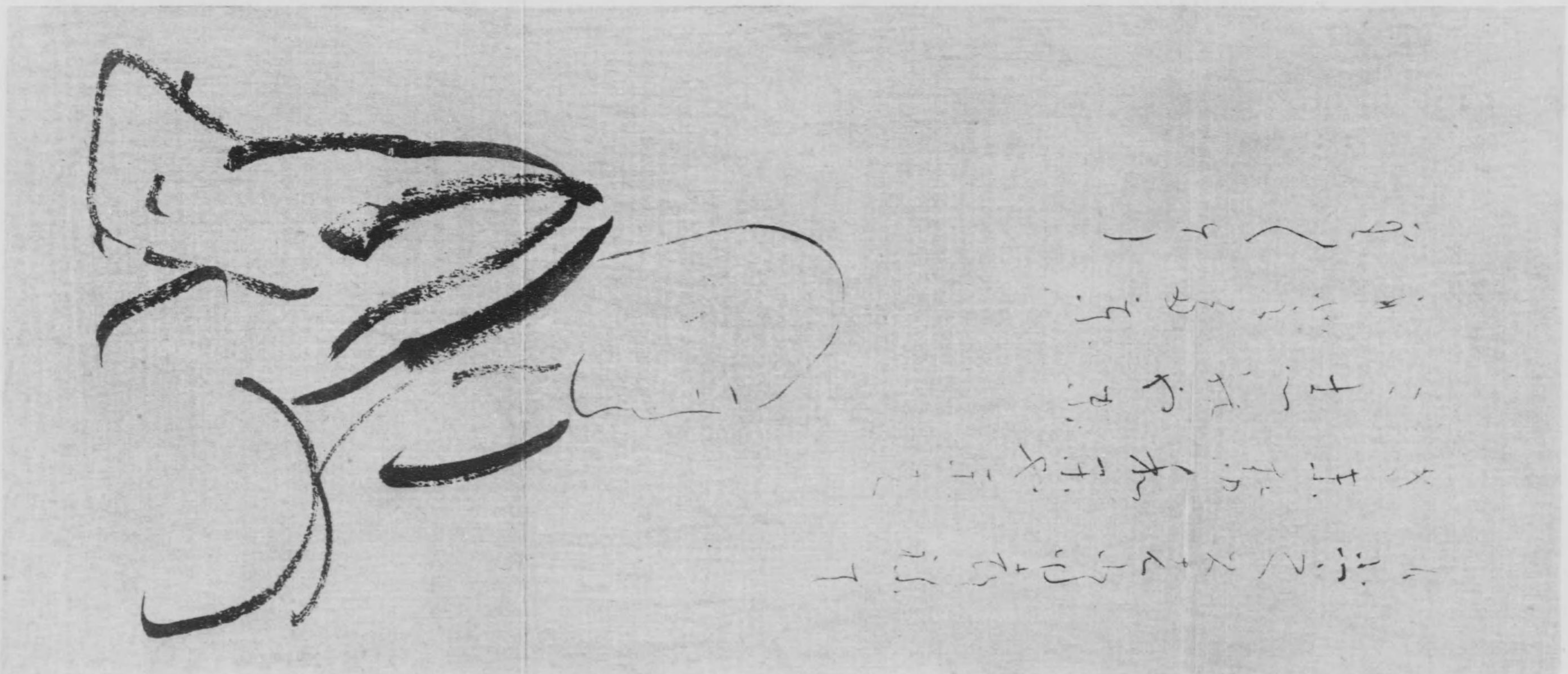
東京春陽堂發行

大正  
7.2.27  
内交



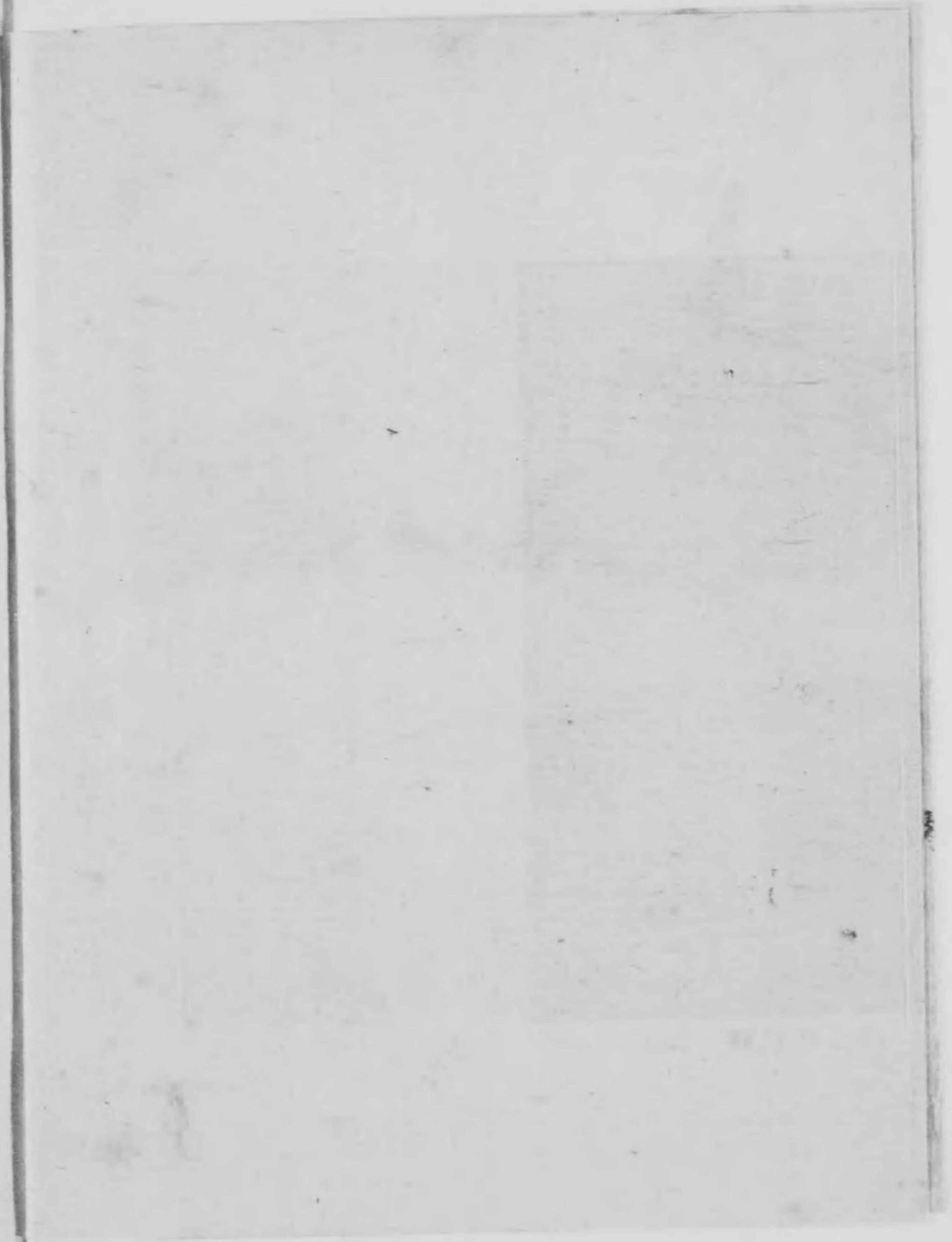
後地藏堂町中村字吉氏藏

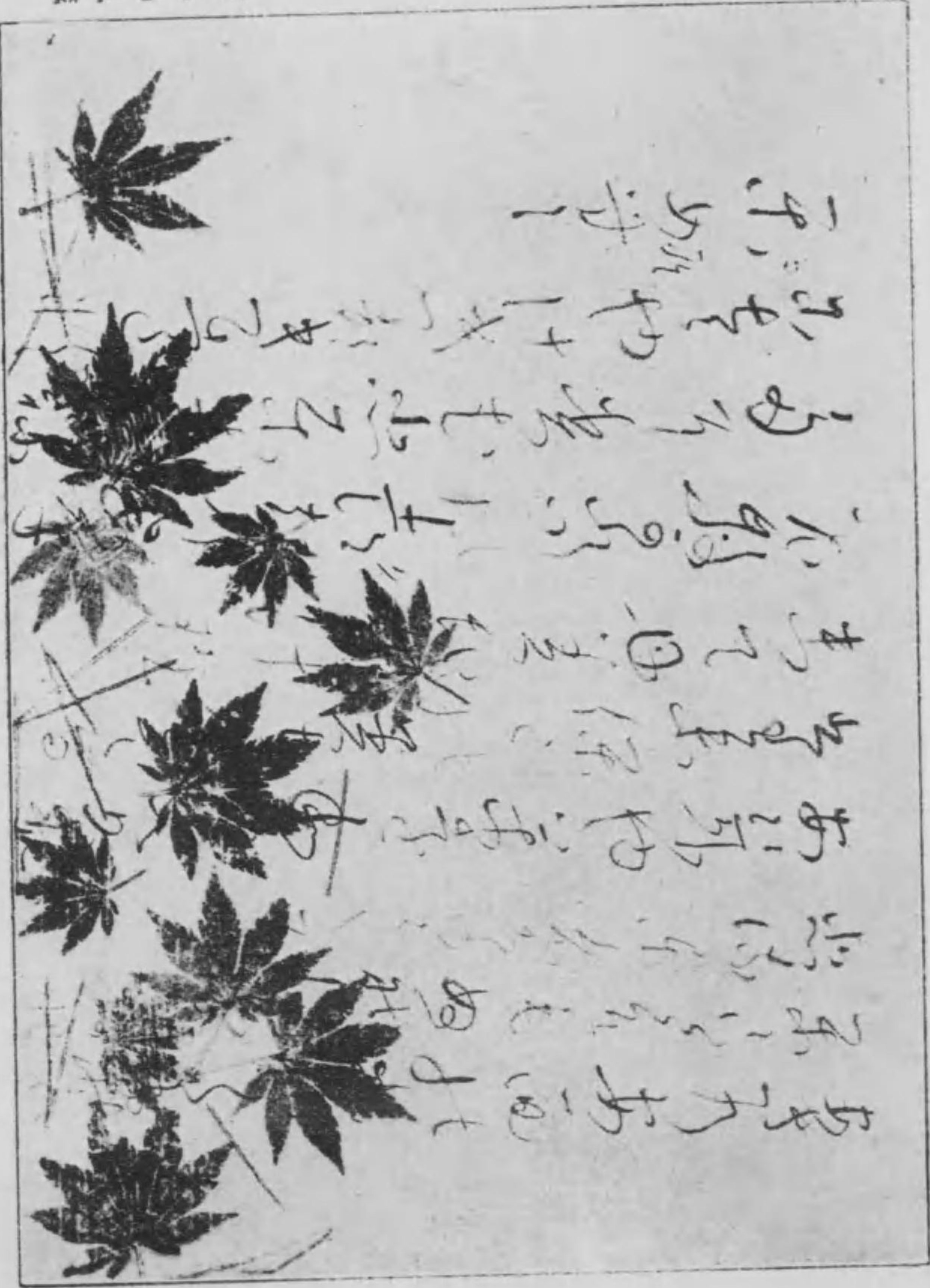
長寛和尚自画像



越後地藏堂町中村宇吉氏藏

貝 舍 諧 凡 像





此の葉は秋の風情を  
 表はすに似たり  
 故に和馬の御風藏  
 といふに相合ふ

此の葉は秋の風情を  
 表はすに似たり  
 故に和馬の御風藏  
 といふに相合ふ

村上國後  
 藏氏郎二淳良解

此の葉は秋の風情を  
 表はすに似たり  
 故に和馬の御風藏  
 といふに相合ふ

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

此後渡部村阿部家藏  
 北越渡部村信樂軒秀藏

新鴻市小林二郎氏藏  
 此乃...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

藏氏郎二林小市鴻新

凡...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

藏家部阿村部渡後越



近江大津宮御宇天皇代 天命開別天皇  
 天皇詔内大臣藤原朝臣競博春山萬花之  
 馳秋山千葉之彩時類田王以歌判之歌  
 本成者去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不聞  
 有之花毛佐家禮村山手茂入而毛不取草深  
 執手母不見秋山乃木葉乎見而者黃葉乎婆  
 取而曾思奴布青手者置而曾歎久曾許之恨  
 之秋山香者

類田王下近江國時作歌并戸王即和歌  
 本酒三輪乃山青丹吉奈良能山乃山際隱  
 萬代道隈伊積流萬代爾奈曲毛見管行武雄  
 歌數毛見放武萬雄情無雲乃隱障倍之也  
 反歌  
 三輪山乎然毛隱賀雲谷裳情有南畝可苦佐  
 布信思哉  
 右二百歌山上憶良大夫類聚歌林曰還都

緒言

口望む人の少なくなひのに引かされて、私はこゝに昨今私の敬慕し  
 研究しつゝある越後の良寛和尚の詩歌を一巻にまゝめて刊行する  
 ことにした。良寛和尚の詩集も歌集も既に二三世に行はれてゐるも  
 のがあるし、又目下準備されつゝあるものもあるやうである。その點  
 から見れば、私が今更かうした企てをすることは、徒らに屋上屋を重  
 れることに過ぎないやうでもある。併し、それにも拘らず、私がこゝに  
 敢てこれをなす所以のものは、一つには從來世に行はれてゐる詩集  
 や歌集に良寛自身の筆蹟との照會によつて多少の重要な訂正を加  
 へんが爲め、二つにはこれまで見出されずに居たもので私自身の目  
 に觸れたものを以て從來の詩歌集にかなり多くの増補を加へんが  
 爲め、三つには私自身の解説なり私見なりを添へて世に出すことに

よつて幾分たりとも良寛に對する世上の記憶を新たにしたいが爲め、四つには之れを以て目下私が書きつゞけてゐる、そして遠からず一冊にまとめて刊行しようと思つてゐる良寛和尚その人の評傳と姉妹篇たらしめんが爲め、五つには良寛和尚その人に對する私の愛慕を紀念せんが爲めなごである。

□既に知れ渡つてゐる如く、良寛には自分で書き集めた完全な詩稿や詠草はなかつた。今日私達が斯くまで多くの彼の詩歌に接し得るのは、詩の方では鈴木桐軒、鈴木文壺、鈴木順亭、寒華子、貞心尼等の古人、小林次郎氏、西郡久吾氏等の今人、歌の方では貞心尼、林麤雄、村山半牧等の故人、大宮季長氏、小林氏、西郡氏等の今人の一方ならざる熱誠と努力とによつてなされた蒐集のおかげである。私は今此の詩歌集を刊行するにつけても、深く、深く、此等の諸家に向つて感謝しなければならぬのである。

□私の此の「良寛和尚詩歌集」編輯の事情については序文の中で、詳しく述べることにして、こゝには省くが、私が此の編輯を成すに當つて材料とし、参考とした書類のうちで重要なものだけを擧げれば次の如くである。

○故人牧江靖齋筆寫「良寛尊者詩集」○同上「沙門良寛師歌集」○西郡久吾氏編流「北越偉人沙門良寛全傳」○大宮季長氏「良寛歌集」○小林次郎氏「僧良寛詩集」及びその附録山崎良平氏「大愚良寛」○小林氏「僧良寛歌集」○故人村山半牧編「僧良寛歌集」○小林榮樓氏著「彌彦神社附國上と良寛」○「越後風俗志」第三輯○齋藤茂吉氏著「短歌私鈔」○同上「續短歌私鈔」

○越後西蒲原郡國上村字渡部阿部桓次郎氏所藏文書五卷「屏風掛字數點」○同上大字牧ヶ花解良淳次郎氏所藏文書三卷「今日茶雜記掛字數點」○新潟市小林次郎氏所藏良寛遺墨數十點○三島郡桐島

村大字島崎木村周作氏所藏良寛禪師歌集二卷、遺墨數十點○西蒲原郡粟生津村鈴木宗久氏所藏文書二卷○同鈴木時之介氏所藏文書翰○同上和田氏所藏遺墨○國上村字中島原田勘平氏所藏良寛文書二卷その他遺墨數點○地藏堂町中村字吉氏所藏良寛自畫像○三島郡寺泊町外山氏所藏良寛遺墨○同出雲崎町島居田中兩氏所藏遺墨○西頸城郡糸魚川町牧江氏所藏遺墨十數點

以上の外諸家に藏せられる良寛遺墨數十點と他に私自身の蔵してゐる數點の良寛遺墨をも材料とした。

□なほ本書の編輯上、及びその他の良寛に關する研究上特に私の爲めに多大の助力をたまはつた松木德聚、藤井界雄、原田勘平、小林次郎、佐藤耐雪、齋藤茂吉、片山三男三、山崎良平、解良淳次郎、故阿部桓次郎、木村周作、高橋重四郎、稻葉仁作の諸氏に向つては、私はこゝに謹んで感謝の意を表する次第である。大正六年十一月十二日、越後絲魚川にて、相馬御風記。

## 良寛和尚の歌と詩とに就て

(之れを序に代へる)

越後の良寛和尚の詩歌集を新たに一冊として刊行するに當つて、私は是非とも一通り人としての良寛についての私見乃至解説を述べるべき筈であるが、それは此の詩歌集の姉妹篇として遠からず刊行されることになつてゐる拙著『大恩良寛』(評傳)の方でやゝ詳細に述べることにしてあるから、茲では特に和尚の歌と詩とについての私見やら解説やらを取り混ぜて述べて置くにとゞめる。



□  
人としての良寛、云ひかへれば良寛和尚その人の生活が私達に對して不思議な精神的魅力を持つてゐると同時に、良寛の歌も詩も共に、私達をして稀有な深い愛着を感じさせる。そして其の愛着を通じて私達は、私達自らの努力だけでは容易に得難いと思はれるほどの、淳真な生活氣分をしみじみ味はして貰ふことが出来る。まったく其の點では、良寛和尚の詩歌は（少なくとも私一個にとりて）その類の極めて少ないものゝ一つであるやうにおもはれる。

これはそも／＼なせであるか。かう云ふ私の疑問に對して、こんな風に答へる人があるかも知れない。それは良寛の詩歌は世にありふれた多くの詩人歌人の作とはちがつて、いづれも彼の永い間の禪門修養の結果出來上

つた超俗的人格の底から發したたましひの聲だからだ」と。成程さう考へれば、さう考へられぬでもない。しかし、それならば古來その所謂禪門的修養の堂奥に達したと云はれてゐる少なからざる超俗的人物の詩歌はいづれも良寛のそれの如く私達をしてしかく離れがたい愛着を感せしめ、しかも淳真な生活氣分のうちへ私達を誘致したかと云ふに、むしろそれは私達にとりて反對の場合が多いのである。又良寛その人の詩歌そのものについて見ても、謂ふところの禪的人生觀に即したらしい彼の作の方には、ごちらかと云へば觀念に墮した力の弱いものが多くて、却て謂ふところのたゞごと歌らしい彼の作の方に深く私達の心を動かすものゝ多いのも事實である。彼の遺弟子貞心尼の如きも彼の歌について書いたものゝ中に、

「長歌みじか歌さまざま有るが中に、時にさり物にたはぶれてよみすて給へるもあれど、それ

だに世の常の歌とは同じからず、ここに釋教は更にも云はず、又月の魂、鉢の子、白かみなごよみ給ふもあはれにたふとく、打ち誦しぬれば自ら心の濁りも清まりゆく心地せらるべし」  
なご、云つて居るけれども、私達には彼女が「さらにも云はず」なご、特別扱ひをした所謂釋教の部に屬する歌の方に寧ろ無くもがなと思はれるやうな作を多く見るのである。隨て此の事については、私達はさうした部類の人達の言説よりも、かの『短歌私抄』の著者齋藤茂吉氏（茂吉の歌を最も深く理解を以て、最も有力な方法で世に紹介した批評家の第一人は齋藤氏である）の左の如き觀方に深い同感を見出すものである。

「昔から禪僧などは多くは奇體な生活を遂げて居る。良寛も先づさうである（御風云ふ、これもあしも）さうことはかり思はれない。然し大抵の禪僧の書いた書畫や作つた詩歌などを見るに、街氣ぶんぶんたるものが多い。良寛の歌になると全然その境が違つてゐる。厭味が殆んど全然ないばかりでなく、氣韻漂渺たるものが多い。」

しかし、かくの如く良寛和尚の詩歌の私達にとりて貴い感化力を持つてゐ

る所以が、主として彼の永い間の禪的修養の結果によるのでない如く、古來の禪僧の藝術に兎角所謂街氣とか厭味とかのぶんぶんたるものが多いからと云つて、それを以て必ずしも禪的修養そのものゝ罪に歸することも出来ない。要はその人如何によるものと見なければならぬこと、思ふ。

その證據には、良寛和尚と共に私達の最も慕はしい詩人の一人である芭蕉も矢張り禪門の修養を経た人であつた。そして禪門から出て、而も聊かも所謂禪臭を帯びない純乎たる藝術を成した點に於ては芭蕉又良寛とその道を同じくしてゐた。而も此の芭蕉と禪との關係については、偶然にも沼波瓊音氏が良寛の場合を齋藤氏が論じたと同じやうな觀方で論じてゐる。即ち沼波氏は云ふ。

「禪を修した人には、佛に逢ては佛を殺し、祖に逢ては祖を殺す云うやうに、凄まじく勢のよ

い人があるものだが、芭蕉も參禪はしたものの、彼の觀じたこの世はたゞ幻で、彼はそれを果敢なみ、泣き／＼その果敢さを味はふ人であつた。……幻と空と去つて心から平氣で居る冷たい人では無かつた。芭蕉はど切實に幻を觀じ、幻を生活しつゝ、なほその幻に十分の溫情を以て交はつた人はない。そこから彼の藝術は産れてゐる。」

沼波氏の此の芭蕉觀は、良寛の場合に當て符める時にも、かなり適切であるやうにおもはれる。良寛と芭蕉との比較については、『彌彦神社附國上の良寛』の著者小林粲樓氏も嘗て次の如く論じた事があつた。

「彼を褒めるものは彼れを以て湖畔詩人ウオルズオースの倫なりと爲す、然れども吾人は未だ良寛がウオルズオースの如き自然の兒にして其大勢を背後に負へるや否やを認識せざるなり但し西行に比すれば理稍勝ち、一茶に比すれば氣品眞然として上れり、唯だ俳聖芭蕉のみ之に儔を同うせんか」

けれども今一步立ち入つて芭蕉の藝術と良寛のそれとを比べて考へると、

達には此の兩者の間にはかなり著しい相異のあることを認めずには居られないのである。沼波氏が芭蕉を觀た如く、私達は又良寛に對して、「彼ほど切實に此の世を幻と觀じ、幻と生活しつゝ、なほその幻に十分の溫情を以て交はつた人はない、そこから彼の藝術は産れてゐる」と觀る。而もそれと同時に、私達を以て觀れば、同じく無常觀乃至空觀に裏付けられた生活の表現ではありながら、芭蕉の藝術は、どちらか云へば理智的であり、客觀的であり、超人間的であるが、良寛のそれは情感的であり、主觀的であり、人間的である。かの「百骸九竅の中に物あり、假に名づけて風羅坊といふ、まことにうすもの、風に破れ易からむことを云ふにやあらん」と云ふ風に自らを觀じ、「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」と云ふ風に自らを持し、「此の道や行く人なしに秋の暮」と云ふ風に自らの生活境を觀じた芭

蕉は既に／＼人間的と云ふ境から高く外に放たれてゐた。そこはもう我そのものに對する悲しみをも憐れみをも慈しみをも離れた寂靜境であつた。「芭蕉の感じた淋しみは、時に砒いしはりを以て髓を刺すやうな苦しみであつた」と沼波氏は云つてゐる。然り、その苦しみその所謂砒を以て髓を刺すやうな苦しみ——それこそ誠に透徹した理性の醸した靈魂の苦しみではなかつたか。さればこそ、やがては又彼は所謂「その愁の心の凝らずして外に高く放たれる」境地にも住し得たのではないか。沼波氏は更に云ふ。

「その苦しみによく耐へ、しみなくさ味はひ抜き、遊び抜き得た所に彼の大きな幸福があるのである。超越する事は易い。併しそれに伴ふ砒の如き閑寂に對してなほ遊ぶ心を持つ事が難いのである。こゝに遊び得て始めて閑寂が不可説の光明を放ち來ることが出来る。芭蕉の藝術は彼の心を通じて世を射る是の寂光である。」

けれども、良寛の藝術には芭蕉のかの「所謂砒いしはりの如き苦しみ」は求むべくもない。良寛にも理智的に世を觀じ物を考へ我を省る瞬間がないではなかつたが、さうした場合の彼は不思議なほど佛教的觀念の範疇に囚へられた彼であつた。彼の理はあまりに型の如くであつた。それにひきかへ、彼が本來の彼自身の面目を赤裸にして歌ふ時、彼の聲は實に純乎として純なる人間そのものゝ聲であつた。良寛は實に純情曇りなき人であつた。苦しみと悶えとは一旦世を離れた彼の上にはつひに其の影を落さなかつた。しかも、苦しみの代りに、彼には悲しみがあつた。悶えの代りに彼には憐れみがあつた。

良寛和尚も芭蕉と同じく、孤獨を味はひ、淋しみを味はつた。けれども彼は芭蕉の如くその淋しさのうちにも留まり遊ぶと云ふやうな事は、

到底なし得なかつた。芭蕉は淋しさを味はふほど、淋しさを苦しめば苦しむほごます／＼その淋しさの奥へ／＼と沈んで行つた。さうしてその淋しさの底から自然を觀じ、人間を觀じ、更に自分の姿を觀じた。かくて、そこから湧き出づる透明無色なる一種の靈酒の刺激によつて、彼はつひにはの／＼とした魂の酔ひを味はつた。しかし、良寛はこれと異なつてゐた。彼は淋しさを深く味はふほど、悲しみを深く味はふほど、ますます／＼切に、自然と人間とに對する愛慕を感じた。しかもなほ、此の切なる人間的愛慕を感じながらも、彼が餘の者と異なつてゐたのは、餘の者がその愛慕に惹かされて走り、つひにはその囚ふるところとなるのが常であるのに、彼ひとり最後までその愛慕を我のうちに藏し、常に孤獨なる靈魂の寂光を以て之れを淨化しないでは置かなかつた點にある。

□

人はよく良寛が最後までも幼な兒の如き淳眞を保ち得たことを讚美する。まことに、彼その人は、彼の藝術は、世にも稀なる淳眞を示してゐる。けれども、彼の此の貴い淳眞は、生れながらにして彼れの持つて居たそれをさながらに最後まで保持し得たものであるかどうかは考へなければならぬ事である。おもふに、一度びは、否幾度びか、彼とても世の常の人々の如く、彼の情念の動くがまゝに世の常の生活裡へと乗り出さうとしたのであらう。而も主情的なる彼は、一方に人にも増して合せんとする欲求に動かされながら、他方に於てます／＼鮮やかに合し能はざる自己の拙なさと世間の錯雜とを見ないわけには行かなかつたのであらう。かくして、彼は——その苦しさに堪へ得なくなつた彼は、心よりも、むしろ身の方を先に



そこから遁れさせ、隔離させやうと企てるより外に仕方なきことを知るに至つたのであらう、しかも、進んで現世的の快樂に遁れるべく、あまりに清く、あまりに弱かつた彼は、結局昔からのさうした種類の人々の唯一のそして最上の遁れ場所であつたところの僧伽生活のうちへと自己の隠れ家を求めるに至つたのであらう。

かくの如き彼であつたればこそ、始めて禪門修業の最も善い効果を獲得することが出来たのである。ともすればかの所謂「佛に逢つては佛を殺し祖に違つては祖を殺すと云ふやうな凄じく勢よい人」になつたり、又はかの所謂「奇態な生活を遂げ」「術奇ぶんぶんたる」藝術を造り出したりし勝ちな禪門の修業は、良寛和尚にとりては實に弱きに徹して強くなり、清きに徹して自由になる爲めの最もよく所を得た修業の一路だつたのである。

幾度か躓き幾度か迷ひつゝも、かくして彼はつひに孤獨に定住して自らの性の淳眞を守り育つべき力を得た。常に佛我れと共に在りとの信念、此の淳眞をさながらに持しつゝ我つひに佛土に到らんとすとの覺悟、いづれか彼の孤獨寂寥を裏づけた力とならなかつたらう。私達が今日愛慕措かないところの良寛和尚の藝術は、實にかうした孤獨の淋しみによつて淨化された、幼兒の如き淳眞なる人間そのものゝ聲なのである。

□

私は前に芭蕉の藝術は閑寂そのものゝ不可説な光明が彼の心を通じて世を射る寂光であると云はれるのに比べると、良寛和尚の詩歌は孤獨の底に於て純化された人間そのものゝ聲であると云ふやうな事を述べた。まづた、良寛和尚の詩歌が私達の心に稀有な貴さをもつた感動を與へる所以は、

彼の詩歌を通じて私達が不思議なほど淳真な人間的愛の慈光に浴すること  
が出来るからである。

旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる……芭蕉  
かたみとて何かのこさん春は花山ほととぎす秋はもみち葉……良寛

此の二人者の絶筆を比べ味はふとき、何とも云ひやうのない微妙な生活氣  
分のけじめが私達に感知されるではないか。

おもふに、良寛和尚は、ある一部の世間に噂されてゐる如き、しかく脱  
俗飄逸な人ではなかつたにちがひない。又他の一部の人々によつて傳へら  
れてゐる如く、彼はしかく粗野豪放な人ではなかつたにちがひない。彼は  
むしろ温情の豊かな、なつかしみにみち／＼した人であつたらう。幼な兒  
の如き淳真と、何人に對しても兄弟の如き親しさを持つたみづ／＼しいほ

がらかな人であつたらう。孤獨の境に住して、ひとり自らの清きを守り慈  
しみはぐくみながらも、常にその淳真な心を以て、人間を愛慕し、自然を  
愛慕して止まなかつた人であつたらう。而して彼の藝術は實に此の愛から  
生れた。幼な兒の如き淳真と、幽谷の泉の如き淋しき清さを以て歌はれ  
た純乎たる人間の愛——これこそまことに良寛和尚の詩歌の精髓ではない  
だらうか。

良寛はおそらく空觀を持して平氣で居る冷やかな人でなかつたと云はれ  
る芭蕉以上に温い心を以て淋しさのうちに眞の人間の心を味はつた人であ  
つたらう。而してさうして味はつた人間心を彼は又おそらく一刻も歌はず  
には居られなかつた人であつたらう。

おもふに、彼くらゐ淋しく且つ清い心を以て、彼くらゐ淳真な幼なさを

以て、ほがらかに、かゝはりなく自然を愛慕し、人間を愛慕し遂げた人は極めて少ないことであらう。而してさうした極めて稀有な自然の愛慕、人間の愛慕の表現であればこそ、私達には良寛和尚の詩歌が又なく貴く懐しいものに思はれるのである。

奔騰、煩雜極まりなき現代生活裡にありて、なほよく私達が斯くも淳真なる斯くも單純なる斯くも清麗なる人間愛慕の言葉に接し得ることは、何と云ふ尊いうれしいことであらうか。騒擾、喧囂——眞の人間の言葉の殆んど聞きとり難き現代に於て、山堂の奥裡に點された燈明の如く、深山幽谷裡に湧き出づる泉の如き、しかく清くしかくまことなる愛の光りと筆とを、今なほ良寛和尚その人の藝術から不盡に與へられつゝあることは、何と云ふ尊い惠恩であらう。

山かげの岩間をつたふ苔みづのかすかにわれは住みわたるかも

かう良寛和尚みづから歌つてゐる。蓋しこれが彼自身の生活の本當の姿だつたであらう。かくの如く孤獨幽寂裡に沈潜した彼にして、始めて淳真に自然と人間とを愛慕することが出来た。しかも、そこには聊かの邪念も、いさゝかの偏執もなかつた。彼はあらゆるものに向つて、ほがらかな、淳真な、幼な兒のそのやうな愛の眼を開いた。いかなる平凡なもの、いかなる陳腐なものに對しても、彼の心はいみじき愛慕を感じた。かの『月の兎』の長歌に於てその極致を示してゐる彼の愛は、凡ての彼の詩と歌との基調を成してゐる。もし彼の詩と歌とを讀んで、それら凡ての基調をなしてゐる彼の淳真な愛を感じるこの出来ない者があつたなら、おそらく良寛の

詩や歌はさう云ふ人達にとりては、堪へがたく平凡陳腐なものであるにちがひない。小澤蘆庵の如く所謂たゞこと歌の主張を成した人は他にないではない。しかし、良寛和尚の如くすなほな心持で真にあれだけ平凡な歌を歌ひ通した人は他に其の比を見ない。

平凡——まづたく良寛和尚の歌や詩くらゐ平凡な相を持つた藝術は殆んど他にないであらう。しかも、同時に良寛和尚くらゐ生命の充實した平凡の詩を成した人も亦殆んど他にないであらう。而して、此の平凡をよく彼の如く高き程度にまで藝術化し得たところのものは、實に彼の愛の力であつた。

□

世上往々にしてわが良寛和尚の詩歌を以て、古來の所謂超凡なる禪僧の

それらの如く見做し、強ひてそのうちに非凡相、超越相、奇拔相等を求めんとしてゐる者がある。私達の斷じてくみしないところである。此の點に關しては、さすがに故伊藤左千夫大人の評語くらゐ私達にとりてかたじけない批判は、甚だすくなかつたやうに思ふ。左千夫大人の其の評論は明治四十年の「日本新聞」に載せられたものだと言ふことだけれども、私があるれを知り得たのは最近公にされた齋藤茂吉氏の「短歌私抄」を通じてであつた。こゝにも私は此の齋藤氏の鈔録について更に私の心を動かした數節だけを引用させて貰ふことにする。

「良寛禪師は、その人すなはち總て詩なり。その心すなはち詩なり。されば目に見たる物におのづから動ける心を、口に出でくるまゝの詞にて、直ちに歌をなせり。」  
「禪師の歌は、心の響きをさながらに響かせたるものなり。即ち良寛上人は限なくその歌の上に想見せられ得るを見ずや。一首の構成上に少しだも手拵への痕を見ず、作者そのの心は、何

等の障りにも逢はず、何等の隔てにも逢はず、其思は其まゝに流露せるが故に、意味にも詞にもいさゝかのまじこほりを見ざるなり。……詩人云はんよりは寧ろ詩細工人たる歌人等に、此の禪師の歌を見しめば、必ずや素湯を呑むの思す云はん。ひれくりこれくりの詩細工人者流いづくんぞ詩を談ずるの資格あらんや。」

「禪師の歌には、想平凡にして材料の陳腐なるものあり。然かも全體さして平凡ならざる、陳腐ならざる所以のものは、作者の生活即ち歌なるがゆゑなり。作者の生活即ち歌の性命を爲せるがゆゑなり。」

「禪師はおのれ以外に世に歌作る人のあることを心にさめざりし人なるに似たり。おのれの歌が人の歌に類するところあるあらずともそれらの事に一切頓着せずして歌を作れるに似たり。或は新し或はふるしなど云ふ事ども念頭に置かさりし如し。」

「禪師の作歌中、これは禪師の柄になき歌なりと思ふもの一首もなきは、禪師の高きを敬せざるを得ざるなり。」

私達は故左千夫大人の如上の卓抜なる見識に對して、今更ながらおごろきを感じざるを得ないと同時に、『短歌私鈔』の著者が眞實な熱意と深い理解とを以て、始めて廣い世間に、廣い我が文學界に、歌人としての良寛を詳細に紹介せられた事に向つて、大に感謝しなければならぬ。私はこゝに『短歌私鈔』著者の良寛の歌の評釋中から、特に良寛の藝術の總評ともなるべき若干の語を鈔録させて貰ふことにする。

「大抵禪僧のかいた書畫や作つた詩歌などを見るに、尙奇ぶんぶんたるものが多い。良寛の歌に於ては全然その境が違つてゐる。厭味が殆んど全然無いばかりでなく、氣韻漂渺たるものが多い。これは主として勉強の結果である。予は解釋してゐる。萬葉の歌の呼吸に觸れ一意修練を重ねた結果である。」

「郭公を詠するといふ様な、陳腐な題の歌を、生かして詠むといふ事は餘程の力が要る。良寛の郭公の歌を讀むに、皆平淡な當り前の歌ばかりであるが平順淡淡の裏に何處もなく犯すべからざる

る緊密の心を味はひ得る。これは萬葉調の歌である爲めだと思ふ。而して萬葉調と云つても萬葉調中の良寛調だから面白いのである。」

「思ふに獨創とか何ぞか云ふ事に就いては良寛は始んど考へずに平氣で勝手に作歌して居たであらう。其がやがて自から獨創の歌を出すに至つたのであらうとも思はれる。」

「徳川時代に前後して宗武良寛元義などの出たのは甚だ興味ある問題である。然かも三人共に互に流派の聯鎖がなく獨立して類似の歌を作つてゐるのが面白い。」

「良寛は一面に於て素人じみた處が非常に多いが一面驚くべき程尙敏である。」

「良寛の歌は總じて平淡單純であるから、左程にも思はない鑑賞者が多いと思ふが、其の境地といひ調子といひ、なかなか手に入つたものである。流俗の歌の氣取まはしやぎの域を脱して滋味と底光と落着がある。それから一般の心を暗指するに實驗の境を描いてゐる點も注目しなければならぬ。」

□

以上二家の言は主として良寛和尚の歌について語られたのであるが、私

達は更に彼の詩についても同様に理解の至つた評語を他の少數の人々から聞くことが出来るのである。即ち先づ山崎良平氏の語を二三鈔録して見ると次の如くである。

「良寛が詩、常に散文的にして平淡、其極絢爛に至る能はざるもの、措辭時に温健を缺き句法或は其位を失ふ。然れども是れ詩人の詩ならざるものにして、彼が詩趣を發揮せるものとなさざるべからず。但その想に至りては眞ちに天真に逼り、造化と合し、感興隨所に湧き、混然として其源を絶たず。然れども其感興常に談理的にして、物に寄せ事に依りて胸中の談理を吐く」

「彼の詩抒情に得る甚だ少なく、精く其英を求めなば、蓋し絶無に近からむ。然れども彼は叙事に於て得たり。寧ろその自然的叙事詩、即ち叙景の詩に於て、自在を極めたり。……良寛が叙景の靈腕既に全く天真と契す」

「彼が詩は形式に於て缺くるあり、然れども其内容に至りては、優に賞揚に堪へたるものあり」

「瑩透玲瓏、遠く深遠を探て、冲澹且つ虚平なる寒山が隱瞻を學で、良寛は露骨亦裸々に陥り、

平淡にして談理の散文詩を成すに至れり」

更に小林燦樓氏は云ふ。

「彼は其生活に於けるが如く其文に於ても亦因はるゝを欲せざりしなり、李杜我に對して何かあらん、唐宋我れに對して何かあらん、三代集我れに對して何かあらん、我れは唯だ我が靈性をして遊戯せしめ、我が情を永うせんとするのみ、世間我れを僧といふ、是れ老僧の詩を作るにあらずして、詩の老僧たる也、我が詩枯淡に失せず、唯だ平談俗語に失す、是れ我が修養の未だ到らざる也と良寛が衷心の聲なりけらし。」

と。少なくとも良寛の詩が、多く平談俗語裡に於てよく天真と契するものあるを以て、その特色と觀られて居ることは、私達のいかにも同感を禁じ得ないところである。之れを要するに良寛の藝術が、歌に於ても亦詩に於ても、同様に平凡單調裡に於ける生命の充實を以て、その最も顯著な特色たらしめて居る事は、識者の夙に認め來つたところである。

生命の充實——それは同時に愛でなくて何であらう。生命の充實した平凡、生命の充實した單純——誰かそれを以て最も淳真なる愛の表現ならずとなし得るものがあらうぞ。良寛和尚の詩歌、就中その詩に於て、私達は往々にしてあまりにも無味乾燥なる談理の語に接して、眉をひそめないでは居られぬ事が少なくない。之れ彼が到底單なる思想の人でなかつた事を證するものである。結局彼は理を索る人ではなく、想を談ずる人ではなかつた。彼は實に態度の人であつた。一は彼本來の性情により、一は彼の閱歷と修養とによつて彼は至純なる意味に於ける「人間の心」の把握者たり得た人であつた。

山かげの岩間をつたふ苔みづのかすかにわれは住みわたるかも

寥々春已暮、寂々長閉門、參天藤竹暗、沒階藥艸繁、鉢囊長桂壁

香爐更無烟、蕭灑物外境、終霄啼杜鵑。

秋氣何蕭索、出門風稍寒、孤村烟霧裡、歸人野橋邊、老鴉聚古木

斜雁沒遙天、唯有緇衣僧、立盡暮江前。

かうした孤獨寂寥の境地に住し得た者にして而もよく淳真なる「人間心」の把握者たり得たことは、まことに稀有な恩恵と云はなければならぬ。良寛は實に此の稀有なる恩恵を極めてすなほに受け入れた人であつた。しかも彼は飽くまでも人間であつた。謂ふところの佛でもなく、謂ふところの僧でもなく、謂ふところの智者でもなく、謂ふところの聖者でもなく、將又謂ふところの白眼子でもなく、良寛は實に最後までも幼な兒の如き一個の人間であつた。彼は人外の境に居て始めて眞實に人間を愛慕し、物外の境に居て始めて眞實に物を愛慕する事を知つた。而して何ものにも囚はれざる幼

兒の如き心を以て、彼は最後までも人間と自然とを愛慕しつゞけた。彼は萬人が以て平凡とし陳腐とするやうな人間心の現はれや自然の風物に對してまでもたゞならぬ驚きと愛とを感じた。良寛和尚の詩歌は、實に此の幼き驚きと愛慕との表現以外の何ものでもなかつた。こゝにこそ彼の藝術の千古に不磨なる生命の存する理由があるのではないか。

□

良寛は更に時としてその時代に於ける人心の趨勢に對し、又は社會の缺陷に對する慨嘆の聲を藝術のうちに托さうとして居る。しかし、彼のさう云つた風な詩歌に接する多くの場合、私達はそのあまりに力弱く、調低きに驚かざるを得ない。おもふに彼は又その種の人でもなかつたにちがひない。このやうな事を思ふ度に、私は彼と親しく相識つて居た解良三郎兵衛



榮友翁の手記中に見出した彼に關する次の如き一節を思ひ合はさないでは居られない。

「師(良寛)余が家(解良家)に信宿日を重ぬ。上下自ら和睦し和氣家に充ち。歸り去ると云ども數日の内人自ら和す。師と語る事一たびすれば胸襟清きを覺ゆ。師更に内外の經文を説き善を勸むるにもあらず。或は厨下につきて火を焼き、或は正堂に坐禪す。其話詩文にわたらず、道義に及ばず。優游として名狀すべき事なし。只道義の人を化するのみ。」

彼の詩歌も亦かくの如き彼の人格さながら表現が、眞にその本領ではなかつたか。而して、私達は此の點に於てこそわが良寛和尚の歌と詩とは、實に無比の貴さを持つてゐるのだと信するのである。

□

わが國古來の隱遁詩人中の最高位に置かれてゐるのは西行法師である。

けれども今日の私達にとりては、西行法師の歌はどこかに眞に親しみ了せないところがある。世の無常に對する此の人の悲しみにも、人間の現世生活に對する此の人のしみぐとしたあはれみの思ひにも、どこか私達のそれとの間に一條の隔たりがあるやうに思はれる。就中此の人の全體的な生活氣分、若くはその時代に於けるある種の人々の全體的氣分の表現であるところの此の人の歌の調子には、私達が感動はされても打ち込めないところがあることを否めない。其の心、その節調、その技巧——いづれの點からしても、西行法師の歌は、私達にとりては稀な貴さを持つてゐる。しかし、親しめない、打ち込めない。

西行法師の歌に比べると、わが良寛和尚の歌や詩はそれの尊さに於て及ばないところがある。しかし、その代り私達にとりての親しみとか懐しみ

とか云ふ點では、良寛和尚の歌は遙かに西行法師のそれの上にある。良寛の歌には私達は心を打ち込むことが出来る。

□

西行法師の歌の調子を假りに琴樂のそれにたとへるならば、良寛和尚のそれは正にある種の民謡の聲調にたとふべきである。前者には器樂に上されて洗練を経た微妙があり、後者には肉聲を以て心ゆくばかり歌はれた淳真がある。前者は想に於てより深く、後者は情に於てより純である。高さに於て前者秀で、大きさに於て後者が抜んで居る。前者は繊細を以て人に迫り、後者は寛裕を以て人を包む。究極するところ前者は高きにありて世を憐れまんとし、後者は我から胸を擴げて凡てを懐かうとする境に至らんとするに似てゐる。

いづれにしても、私達にとりて不思議なほど懐しく慕はしきは良寛和尚の詩歌である。

二

良寛和尚が最初何人について詩歌の道を學んだかは今日なほ確實でない。しかし、彼の父橘以南(文政十一年)が夙に久村曉臺や藤原光枝(羽後行脚、又大村在太郎三編、京都の人、後江戸に移り、文化十三年四月十六日歿、年六十三)等を師友として和歌俳諧を學んで堂に入つて居たと云ふ事實があり、且彼みづからも成童の頃地藏堂町狭川子陽の塾に入れられ和漢の學を修めさせられたと云ふ事が明らかである以上、彼の詩歌に關する素養は既に幼時から如上の人々によつて與へられてゐたことは疑ふべくもない。それにしても、彼が始めて自ら詩や歌を詠み出したのは、いつ

頃であつて、その頃の詩歌はどんな風のものであつたかについては今日傳へられてゐる彼の作品だけでは全くわからないのである。

彼の遺弟子貞心尼の記録によれば、彼は「是らの事をむねとしたりまはねば、誰によりて問ひ學びもしたまはず、たゞ道の心を種子としてよみ出で給ひぬ」と云ふ事であり、且諸所の口碑によれば彼は常に「余に三嫌あり書家の書、歌人の歌及び詩人の詩、及び料理人の料理之れなり」と云ふやうな事を口にしてゐたと云ふ事であるから、その道の修練も彼にありては世間多くの歌人や詩人のそれと全然趣を異にしてゐた事は推察するに難くない。彼にとりては詩を作り、歌を詠まうと云ふことよりも、自己の主觀を、乃至自己そのものを如何にして表現せんかと先であり、且主であつたにちがひない。折にふれ、事につけ、境に應じて、彼は自己の最も力強いとお

もつた表現法を採つて自己を表現した。そして、かくの如く自己を表現しつつ、一步一步おのづから修練を積んで行つた。さうして出來上つたのが彼の詩歌であつた。

そんな風であつたから、彼の詩や歌のうちには、總體の格好が殆んど同じであつて一句又は二句若くは一字又は二字ぐらゐちがつてゐるのが幾つもある。彼には別に定まつた詩稿又は詠草がなかつたらしいから、自分の詩や歌を甲の人へ書いて示した場合と、乙の人に書いて示した場合とでは、さまざまの點でさうした違ひを生じたものと思はれる。無論さう云つた風の違ひのうちには、彼自身の記憶ちがひも少しはあつたであらうけれども、多くの場合それは彼のおのづからなる修練の階段を示してゐるやうに見受けられる。さうしてこんなところに窺はれる彼獨特の藝術的修練に向つて、

私達は何とも云へない慕はしさを感じないでは居られぬのである。

□

今日知れてゐる限りの彼の詩歌について見れば、詩の方が歌よりも早くから彼によつてうたはれてゐたらしい。

### 圓通寺

從來圓通寺、幾回經冬春、門前千家邑、乃不識一人、衣垢手自濯  
食盡出城闌、曾讀高僧傳、僧可清貧。

備中玉島圓通寺修學時代に詠じた此の詩が、彼の詩歌を通じての最も夙い作であるらしく思はれるのである。

おもふに、禪僧生活では歌よりも詩に親しむ事の方が、より多くあつたであらうから、彼も亦おのづから先づその方を採つて自己表現を試みたの

であらう。けれども、今日彼の詩として傳はつてゐる大部分は、四十四歳に彼が再び越後に歸つて來てから以後の作で、それ以前の作は、ほんの少數の旅中吟があるに過ぎないのである。

□

詩に於ても、歌に於ても、良寛がその道の師と稱すべきものを持つてゐなかつた事は上述の如くであるが、彼の常に好んで讀んでゐた詩が詩經、離騷十九首及陶淵明、寒山、李白、杜子美等のそれであつた事は、彼の書翰その他によつて明らかに窺ひ知る事が出来る。就中寒山詩の枯淡味が彼の最も身を打ち込んだものであるらしく思はれる。それについて山崎良平氏は云ふ、

「黄山谷嘗て淵明を學んで其妙を得、唯寒山の詩に至りては、悚心刺目、尙ほ且其域に造詣す

る能はざりしと。蓋し寒山の詩や、詩人の詩にあらずして隱者の詩なればなり。至人の詩なればなり、詩人の遂に學ぶ能はざりしは其故にして、大隱至人にして始めて之を學ぶべきなり。良寛其境既に此に似、其人亦此に通ぜり。宜なり、彼が其人に於て學び得たる所の多大なるや。彼は意を用ゐて之を學びたるにあらず、熟讀その極に達して同化の境に至れるなり。而して卓  
牢物に關せざる、時有てか、寒山が句を以て自己詩中に轉置し、敢て怪しむなかりき。」

誠に當を得た見解であると思ふ。彼の詩集草堂集の序に於て編者鈴木文臺も「禪師之淡々于世味、猶不能止而有聲、於此聲也、雖未必有徹箴諷諭、悉有補于世、要皆逼眞境、而振其眞聲、自成機軸、清韻高調可謂古也、比之噂々詩人、其高卑如何乎、讀者聞其聲、而知古色之存于今」と云つて居る如く、良寛の詩には到底他人の企及しがたい一種の古趣がある。而もその古趣は、謂ふところの擬古の類ではなくして、それはおのづから作者その人とは離すことの出来ない生命ある特色を成してゐるのである。隨て彼

が寒山を學んだが爲めに、彼の詩が寒山詩の調を備へたのではなくして、彼の詩が始めから寒山のそれでないければ學ぶべきものゝない傾向を持つてゐたのである。況んや私達の觀るところを以てすれば、談理の幽玄に於て良寛は到底寒山に及ぶべくもないが、古素諄朴の眞に至つては良寛遙かに寒山の上にあるが如く思はれるに於てをやである。

□

かくの如く詩に於て寒山に逼つた良寛和尚は、歌に於て専ら萬葉に打ち込んだのはさもあるべきことゝ云はなければならぬ。彼と親交のあつた解良三郎兵衛榮友の手記に次の如き事が書いてある。

「余問ふ、歌を學ぶ何の書を讀むべしや、師曰く萬葉をよむべし。余曰萬葉は我輩不可解、師曰わかるだけで事足れり、師時に曰く古今はまだよいが古今以下不堪讀と」

これによつて見ても、彼が如何に萬葉を尊んでゐたかゞ解るのである。傳ふるところによれば、良寛は彼の周囲の人々を通して、前に擧げた江戸の歌人藤原光枝及び林國雄など、師友の關係があつたこの事である。私の藏してゐる良寛遺墨の斷片に「光枝うしの世をすくさせたまひぬとき」と前書のある歌に「なにごともみな昔とぞなりにけり花に涙をそくけふかな」と云ふがあり、又それと並んで「靈前に花をたてまつるとて」と前書して「さむしろにころもかたしきよもすからきみとつきみしこどもありしか」と云ふ一首まで添へてあり、又西郡氏の『良寛全傳』中にも「光枝うしのみまかりたまひぬとき」と前書をした「今更にこのの八千度くやしきはわかれし日よりはぬなりけり」と云ふ一首が收めてあるところから考へれば、その藤原光枝と云ふ歌人との交りもかなり深かつた事は

明らかである。更にこれも良寛と親友のあつた原田有則の遺墨中に、

美豆枝うしとひとよやとりてつとめてかへらむとするころにて

やまかけのすきのいたやに雨はふりこねさすたけの君がしばしとたちと  
まるべく……………良 寛

こたへまつる

わすれめや杉のいたやにひとよみし月ひさかたのさちなき影の静けかり  
しを……………美豆枝

こんなことも書いてある。又光枝の歌としては

我よはひむそちといひてひとつ子のかすにしあれやむつき來にけり

ふたよ隔たる

こよひさへたゝに明なはうきことをみよとやならむ月かたふきぬ

よをなけく人のもとへよみてつかはしぬる

こしの海にうきしつむ玉するつひにひかりみえなむうきしづむ玉

雨降山の花いさよしそれよめさあるに

久方の雨ふる山のさくら花露さへかけてにほふらむかも

などが知られてゐる。この光枝と云ふ人の生涯は前に掲げた如き極めて簡単な事しか知れてゐないが、久しく越後に來遊して西蒲原郡渡邊村阿部家、原田家などに滞在してその附近に少なからぬ和歌の弟子を持つてゐたこと、良寛兄弟も皆その人とかなり親しい交りのあつたことなどは、明らかなる事實である。

齋藤茂吉氏の『短歌私鈔』の中に左の如き重要な一節がある。

「良寛が三十歳の時は丁度天明六年に當つてゐる。加茂真淵がすでに歿して、本居宣長および其の門人、加藤千蔭、村田春海、荒木田久老、小澤蘆庵などの熱心なまがらの圓熟した時代

である。良寛が四十八歳で五合庵に住し初めたは文化元年である。もう小澤蘆庵も本居宣長も歿し、文化二年には荒木田久老が歿し、同年に加藤千蔭、同八年には村田春海が歿してゐる。文化二年は香川景樹が養家を去つて獨立した年である。それから良寛の寂に至る間は香川景樹の活動時代であつたと見てもよい。いろいろな流派が互に勉強して自流をひろめようとしたと謂つても、良寛の晩年に於ける我國の歌壇は、景樹の勢力の定まつた時であるを看做してもよからうと思ふ。良寛は天保二年に七十五歳で寂し、景樹は天保十四年に七十三歳で歿してゐる。良寛が眞に萬葉ぶりの歌を作つたのは五合庵定住以後にあるらしい。萬葉を尊ぶに至つたのはいはゆる古學派の言説作物から暗指を得たものか、或は全然交渉なくて然かなつたものか、一言で斷ずることが出来ない。しかし、縦ひ直接作物の影響がないとしても、言説から幾分の暗指を得たを考へる方が良寛の歌風を解釋するに便利である。」

以上は良寛の歌風について考へる上には、誠に重大な問題であるが、私は今日までに考へて見たところではさうした時代的影響は矢張前に擧げたあ

まり有名でなかつた歌人藤原光枝などを通して間接に良寛の歌風の上によく分かの暗指を興へたにちがひないと解釋してゐる。更に確かな事は解らぬが、江戸の古學者林國雄なども後に多少の交はりがあつたと云ふから此の人などからも多少の暗指を受けたであらうと思はれる。

しかし、良寛が始めて萬葉集を讀んだのは、いつ頃の事であつたかと云ふ事については、私は今日なほ確實な事を知り得ないのである。成程、彼が借讀し且それに千蔭の『萬葉集略解』を参考して朱書を施した「仙覺本」の萬葉集二十卷が今日なほ彼の繁く出入してゐた西蒲原郡渡邊村阿部家に保存されてゐる。そしてそれは文化二年刊行のものである。又良寛がその爲めの参考書とした『略解』は與板町大坂屋三輪氏から借りたものであることも、彼の阿部定珍に送つた書翰で現存してゐるものゝうち明らかに記

されてゐるけれどもこれだけの事實によつて彼が其の時始めて萬葉集を讀んだのだと解釋を下すことは、いさゝか躊躇を感じる。

たゞ併し私は『短歌私鈔』の著者と同じくかう云ふ事だけは明言するこゝとが出来ゝるやうに思ふ。それは良寛和尚が「眞に萬葉ぶりの歌を作つたのは五合庵定住以後にある」と云ふことである。之れを言ひかへて見ると、良寛は或は以前にも萬葉集を讀んだことがあつたかも知れないが、眞に萬葉集の精髓を會得し、そのうちへ自分を打ち込むやうになつたのは、五合庵定住以後にあると云ふ事になる。おもふに良寛は夙くから萬葉集ばかりでなく、その他の古來の歌集や又は他の人々の歌などをも手に觸れるまゝに興味を以て讀んでゐたのであらう。そして自己の生活が漸く徹底の域に進み、自己そのものが諄真化され單純化されるに及んで、結局歌の上でも



萬葉集でなければ到底満足が出来ないことになつたのであらう。而してこゝがつまり同じく萬葉ふりと云つても、良寛のそれが他の多くの萬葉派の歌人達のそれと根本的に相異してゐるところである。かの『短歌私鈔』の著者が良寛の歌調を評して「萬葉調と云つても萬葉調中の良寛調だから面白いのである」と云ひ、或は「良寛は僻遠の地にあり、貧しい参考書に據つて萬葉を讀んだ、そして訓鉛釋義に道草を喰はず易々として萬葉の歌の本質に飛び込んでゐる、それゆゑ良寛の萬葉觀について論ずべきことあらば藝術としての萬葉の歌の本質に就ていふべきである」と云つてゐるのは卓見である。要するに良寛の歌が主として萬葉のお蔭を蒙つてゐることは明らかであるが、併しそれは彼自身の生活そのものからの當然の結果であつて決してそれは世上多くの萬葉派歌人のそれと同一視すべきものではない

のである。

□

萬葉集と共に良寛が『古事記』をも味讀してゐた事は、阿部定珍、中村權右衛門などへ宛てた彼の書翰によつても明らかな事實であるが、更に左の如き『古事記』中の歌と彼自身の歌とを比べて見ると、更に彼が如何に『古事記』中の歌をも深く味はつたかの一端が窺はれるのである。

いざ子ども、野蒜摘みに蒜摘みに、我が行く道の、香はし花橘は、上枝に鳥居枯らし、下枝は人取り枯らし、三つ栗の中つ枝の、含隠る赤ら少女を、いざさらば宜らしな(應神天皇御製——古事記)

○

いざ子ども、山べに行かむ董見に、あすさへちらばいかにとかせむ……

……(良寛)

又

久駕美のおほとこのしまへのひとつ松、上つ枝はてる日をかくし、なかつ枝は鳥を住ましめ、しづ枝はいらかにかかり、ときしくぞしもはふれども、ときしくぞ風は吹けども、ちはやふる神の御代より、ありけらしあやしき松ぞくがみの松は。……(良寛)

□

良寛和尚の歌には、あまりに深く萬葉に心を打ち込んだ結果、時々我知らず萬葉中の歌そのまゝの句を轉用してゐるのが少なからずある。今その一二例を舉げて見ると次の如くである。

月よみの月に來ませあしびきの山をへだて、遠かゝるに(萬葉)

四六

四七

月よみの光をまちてかへりませ山路は栗のいがの多きに(良寛)  
袖垂れていざわがそのに鶯の木づたひ散らす梅の花見に(萬葉)  
こゝろあらばたづねて來ませ鶯の木つたひちらす梅の花見に(良寛)  
潮干なば玉藻刈りこめ家の妹が濱菖乞は、何を示さむ(萬葉)  
秋やまのもみちは散りぬいへつとに子等が乞ひせばなにをしまし(良寛)  
夏山の木末の繁には、とききす鳴きとよむなる聲の遙けさ(萬葉)  
夏山をこえて鳴くなるほどとききす聲のはるけきこのゆふへかも(良寛)  
黄葉の過ぎまく惜しみ思ふとち遊ふ今宵は明けすもあらぬか(萬葉)  
此の宮の杜の木下に子どもらとあそぶ春日はくれすともよし(良寛)  
水鳥の鴨の羽の色の春山のおほつかなくもおもほゆるかも(萬葉)  
水鳥の鴨の羽の色の青山の木ぬれたちくき鳴くほどとききす(良寛)

かうした例は他にまだいくらもある。けれども、此等を以て徒に萬葉の剽竊や模倣であるとは云ひ得ない。良寛の歌には良寛の歌として立派に獨特の生命があるからである。

□

良寛の歌には又、前にも述べた如く、同じ格好の歌を、一句乃至二句ぐらゐちがへて二様にも三様にも書いたものが、かなり多い。中には乙が甲の直した結果を示してゐるものもあり、中には又甲乙共に獨立した歌として取扱つた方が好いやうに思はれるものもある。この事は、良寛が自身の詠草と云ふやうなものを持たないで、たゞ記憶に従つて書きちらした事にも因るのであらうが、他面それは彼の極めて自然的な修練を示して居ることもおもはれる。更に此の事は齋藤茂吉氏が云つたやうに「苦勞の足りない」

證據にもなるかも知れぬが、考へやうによつてはさうした自由さ、さうした苦勞無さが寧ろ良寛の歌の良寛の歌たる所以であるとも云ふ事が出来る。

□

良寛の歌には語法上文法上の誤りがかなり多い。又良寛の詩には作法上の誤りが少なからずある。そこが彼自身の所謂「歌人の歌、及び詩人の詩」でないところかも知れない。しかし、かうした缺點を缺點として良寛和尚の詩や歌を貶してかゝることは、斷じてゆるされない事だと思ふ。直ちにその核心に觸れる者の爲めだけに、良寛の詩歌が存在してゐるのだからである。

□

私は前に良寛が萬葉風の歌を詠むやうになつたのは、彼の五合庵定住以後にあるらしいと云ふ『短歌私鈔』の著者の説に同感である旨を述べたがそれ以前に於ける彼の歌風についても私は同じ人の西行の歌風に近いと云ふ説に同する。しかし、それについて藤原光枝の影響もあるらしいと云つた同じ人の推察には、私は同じかねる。何となれば五合庵定住以前に於て良寛は藤原光枝と接近する機會が少なかつたやうでもあり、且前期の彼の歌の多くは彼の他國雲水中のものだからである。

西行ぶりから萬葉ぶりへ——兎に角かうした良寛の歌風の變遷は、彼の生活そのものゝ變遷と考へ合せて誠に意味深い事である。

□  
寒山詩と良寛の詩との關係、萬葉集と良寛の歌との關係——この問題も、

それが內的に深く考へられれば考へられるほどますます味はひの深い考察の題目だとおもふ。そしてこれはさまざまの意味でその事を考へる者自身の爲めになることである。

□  
良寛は寒山詩を學び、萬葉の歌を學んだことは明らかである。しかし、彼の「學び」は決して普通の意味での「學び」ではなかつた。彼は又詩に於ても歌に於ても、又書に於ても素人を以て任じてゐた。しかし、その「素人」も決して普通の意味での「素人」ではなかつた。此の事は良寛の藝術を味はふ上にも、良寛の藝術に對する態度を考へる上にも、極めて重大な事である。

□

良寛和尚の詩歌は、結局良寛和尚その人以外何人の詩歌でもなかつた。しかし、それと同時に良寛には自己獨特の藝術を生み出さうなど云ふ者も無かつたにちがひない。むしろ彼は極めて自然に歌ひもし書きもしてゐたにちがひない。彼が歌ふ時、彼の眼中には寒山さへも萬葉さへも無かつたであらう。況んやそれ以外の他人の詩歌などをやである。「水の流るゝが如く、鳥のうたふが如く」と云ふことは、彼の如きについてこそ始めて云ふことが出来る。しかも、良寛和尚の藝術は、良寛和尚その人のみの創造であつた。

三

良寛の歌にしても、詩にしても、彼自身の手で書き纏めた詠草と云ふや

うなものもなく、又詩稿も極めて一寸したものしかなかつたらしい。そして多くの場合彼は到るところの家で、或は自ら興に乗じ、或は他人から求められ、或は他人との應答に於て、手あたり次第紙筆の如何などに頓着なく書き散らして自ら味はひ、他人にも示し——それでもう彼は充分満足してゐたらしい。その證據には彼の筆蹟として今日越後の各地方（就中蒲原郡三島郡方面）の諸家に愛藏されてゐるものは驚くべく數多いにも拘らず、屏風や掛物にする目的で特に立派な紙に行儀よく書いたものとか、色紙とか短冊とか云ふものに格式によつて書いたものとか云ふのは極めて稀であつて、大半は有り合せの半紙とか巻紙とか又は端紙とか云つたものに即興的に書いたもので、さもなくば手紙の中へ歌や詩を書き添へるか、又は手紙に代へて歌や詩を書き送つたものである。隨てこれが良寛和尚の筆蹟で

あると云つて保存されてゐるもので、良寛その人の落款や署名のあるものと云つては之れ又甚だ少ないのである。文化八年に出版された『北越奇談』(越後三條の人  
其筆蹟及世著)と云ふ書物に、良寛の事を叙し、彼が永年の雲水の旅から始めて郷里へ歸つて來た當時の事をこんな風に書いてゐる。

「海濱がらみ郷本もとと云へる所に空庵ありしが一夕旅僧一人來つて隣家に申し彼空庵に宿す、翌日近村に託鉢して其日の食に足るときは即ち歸る、食あまる時は乞食鳥獸にわかちあたふ、此の如き事半年諸人其の奇を稱し、道徳を尊んで衣服を送るものあり、即うけてあまるものはまた寒子にあたふ、其居出雲崎を去ること纔に三里、時に知る人在り、必橘氏某ならんことを以て予が兄彦山に告ぐ彦山即郷本の海濱に尋てかの空庵を窺ふに居らず、只柴扉鎖すこまなく薛羅相まといのみ、内に入りて是を見れば机上一硯筆、爐中土鍋一つあり、壁上皆詩を題しぬ、これを讀むに塵外仙客の情おのづから胸中清月のおもひを生ず、其筆蹟まがふ所なき文孝(此の著者は良寛の俗名は少季であつたこと云つて)なりしかば……云々」

此の記録の信ずるに足るべき程度についての考證は別としても、良寛が彼の假寓して居た草庵の壁上に詩を題してゐたと云ふやうなことはおそらく幾度か演じられた事實であつたらう。又三島郡七日市山田權左衛門方の下女部屋の障子に、かの名高い鉢の子の歌を書きつけたとか、又は三島郡與板町在花井村佛師與三治と云ふものが寺泊附近の海岸で良寛に出遇つて、路上に立ちながら塵紙の面に「このごろはこひしきものは濱邊なるささるの殻のふたにぞありける」と云ふ歌一首を書いて貰つたとか、さう云つた風な逸話付きの良寛の筆蹟が、少なからず残つてゐるところを見ると、良寛その人が自作の歌や詩をどんな風に取り扱つてゐたかと云ふ事がほゞ想像する事が出來、かねて彼みづからの手で纏めた詠草や詩稿と云つたやうなものゝ無かつた事實も、信じられるのである。

□  
さて然らば、そんな風に無造作に書き散らされた良寛その人の歌や詩が  
どうして今日見るごとき多数を集め得られるに至つたかと云ふに、これは  
無論貞心尼、林甕雄、鈴木順亭等をはじめとして次々に出て来た熱心な蒐  
集家の努力に負ふところ最も多いのであるが、それと同時に吾々は前述の  
如く良寛その人によりて無造作に書き散らされた断片零墨が、あれまでに  
數多く保存されて居たことの有難さを感じないでは居られぬのである。云  
ふまでもなく少數の識者間には、良寛の價值が生前から既に或程度まで認  
識されて居た事は明らかであるが、しかも一般無學の人々の間にまでも、  
良寛の筆になつたものがしかく尊重され、しかくよく保存されて来た事、  
而もそれらの多くが所謂断片零墨のたぐひですらもあつたと云ふ事は、今

日の吾々にとりては不思議なほど嬉しい事實である。而して此の事は身親  
しく良寛が住んでゐた場所に近い地方について、それら多くの遺品を観る  
者でなければ、その本當の不思議さ、ありがたさが解らないだらうと思  
はれるほどである。

□

そこで更にそんな風にして保存せられて来た断片零墨について、良寛そ  
の人の歌なり詩なりの蒐集に着手した最初の人是谁かと云ふと、それは前  
にも挙げた如く、歌の方は良寛の殆んで唯一人の遺弟子であつたところの  
貞心尼と、良寛の周囲の人々と相識り文政天保の間にその地方に來遊して  
居た江戸の國學者林甕雄との二人であり、詩の方は越後西蒲原郡粟生津邑  
の鈴木順亭及び上州前橋龍海院の藏雲和尚である。

第一の歌集、即ち貞心尼の輯録に成るところのそれは『蓮の露』と題し  
天保六年五月一日に完成されたもので、短歌百十餘首、長歌十餘首、旋頭  
歌數首、及び俳句十一句が收めてある。そしてそれには次の如き序文が添  
へてある。

「良寛禪師と聞えしは、出雲崎なる橋氏の太郎のぬしにておはしけるが、十八歳さいふ年に、  
かしらおろし給ひて、備中の國玉島なる圓通寺の和尙玉仙といふ大徳の聖のおはしけるを師と  
なして、年ころ其處に物し玉ひしとぞ、又、世に其名聞えたる人々をばをちこちさなくあまねく  
尋れさふらひて、國々にすぎやうし玉ふ事はたこせばかりにして、遂に其の道の奥をきほめつく  
してのち、故里へかへり給ふといへども、更に住む所を定めず、こゝかしこ物し玉ひしが、後  
は國上の山に上り、自ら水汲み薪を拾ひて行ひすませ玉ふ事三十年とか、島崎の里なる木村何が  
しふもいもふのかの道徳をしたひて親しく参りかよひけるが、齡たけ玉ひて斯る山かげにたゞ一  
人物し玉ふ事の、いと覺束なふ思ひ給へらるゝをよそに見過しまゐらせむも心うければ、おの

が家居のかたへに、いさゝかなる庵のあきたるが侍れば、かしこにわたり玉ひてむや、よろづ  
は已がもさより物し奉らむとそゝのかし参らするに、如何が覺しけむ船舟のいなとも宣はず其  
處にうつろひ給てより、主いさまめやかに後見聞ければ、せじも心安しとてよろこほひ給ひ  
しに、其年より六とせさいふ年のはじめつ方、遂に世を去り給ひぬ。

かくて世はなれたる御身にしも、さすがに月花の情はすて玉はず、よろづの事につけ折にふれ  
ては、歌よみ詩つくりて其心ざしをのべ給ひぬ、されど是らの事をむれし玉はれば、誰によ  
りて問ひ學びもし玉はず、只道の心をたれとしてぞ詠み出で給ひぬる其うたの様、自ら古手振  
にて姿言葉もたくみならねど、丈高く調なたらかにして、大方の歌よみの際にはあらず、長歌み  
じか歌ささま／＼有るが中に、時にとり物にたはふれてよみ捨て玉へるも有れど、それだによ  
の常の歌とは同じからず、殊に釋教は更にも云はず、又月の兔、鉢の子、白かみ、など詠み玉ふ  
もあはれにたふさく打ちずしぬれば、自ら心の濁も清まり行く心地なむせらるべき、此の道に  
心あらむ人、此の歌を見る事を得て、心に疑ふ事あらずば何の幸か是に過ぎんや、さればかゝ  
る歌ごもの、こゝかしこに落ち散りて、谷の埋れ木埋れて世に朽ちなむ事のいさ／＼をしけれ



ば、此處にさひかしこにもとめて、やうく／＼にひろひあつめ、又己が折ふしかの庵へ参り通ひし時、よみかはしけるをもかき添へて一卷さもなしつ、こは師のおほんかたみさ傍におき朝夕にさり見つゝこしかたしのぶよすがにもとてなむ。

天保むつの年の五月のついたちの日に真心しるす

此の序文中にも見える如く、此の集は歌の数が甚だ少ないけれども、良寛と此の愛弟子との間によみかはされた贈答歌の殆んど凡てが添へてある爲めに、その點だけでも他に類のない價值ある歌集である。而も此の集はつひ刊行される機會なしに、草稿のまゝ今日では越後柏崎中村藤八氏によつて珍藏されてゐるのである。良寛と真心尼との關係及び真心尼その人の生涯などについてはかなり多く述べたい事もあるが、さうした事は前にも述べた如く凡て『大愚良寛』中に譲ることゝして、茲ではたゞ良寛の歌の最初の蒐集者としての真心尼の功蹟を記して置くにとどめることゝする。

次に真心尼と並んで良寛の歌の最初の蒐集者の一人として前に林龜雄の名を挙げたが、それは西蒲原郡粟生津邑の儒者鈴木文臺が、岩船郡村上藩の藩士三宅相馬と云ふ人に宛てた書簡中に、「寛師和尚遺稿二卷(西郡氏「良寛遺稿」に  
は四巻とあり)」江戸國雄の義子鬻雄と申すもの取しらべ上梓可致と先年より其催しも有之候」とあるところから推察したのであつて、その歌集が果して上梓されたかどうかと云ふ事も、亦その歌集の如何なる内容を持つたものであるかも、つひ今日まで知る事が出来ないのである。しかし、私が偶然にも私の郷里越後糸魚川町の牧江氏(「家譜」)の藏書中から發見して寫し取つた『沙門良寛師歌集』と題した寫本(「寛師遺稿」に書寫し  
たものと推定される)が、或はその複寫ではないかと推測されるさまぐの特色を持つてゐるのである。第一、此の歌集の輯録の仕方がこれまで私の見た限りの他のいづれの歌集のそれとも異つたも

のであること、第二筆寫の年代がおそくとも慶應三四年頃だと推定されること、第三此の歌集に限り上下二卷に別たれて居て、上卷には短歌のみを收め下卷には長歌と旋頭歌のみが收められてゐる點が、他のいづれの歌集とも異つて居り、且その二卷に別たれて居ることが前に掲げた鈴木文臺の書翰中に「寛師和尚遺稿二卷江戸國雄の義子甕雄と申すもの取しらべ上梓可致云々」とあるのと符合すること——かう云ふ諸點から考へて、私は此の『沙門良寛師歌集』が即ち良寛の最初の歌集として江戸の林甕雄によつて蒐集されたものと同様であると推定してゐるのである。此の歌集には短歌三百五十餘首长歌二十一首、旋頭歌十四首を收めてあつて、貞心尼の『蓮の露』に比べるとその數に於て遙かに多い。

以上の二人に次いで良寛の歌を蒐集した人は、越後三條の人村山半牧で

ある。半牧が越後で最も有名な明治維新の志士であり、且拔群な文人畫の名手であることは今更云ふまでもないが、此の人が一方に良寛の歌の蒐集者であつた事は、更に一奇と云はざるを得ない。此の半牧の集めた良寛の歌は『僧良寛歌集』と題して明年十二年に新潟の小林二郎翁が半牧の筆蹟をそのまま版に刻して刊行してゐる。歌の數は長歌十四首、旋頭歌九首、短歌九十三首にしか過ぎないが、一風變つた味はひのある歌集である。

以上の外明治二十五年には小林二郎翁の蒐集にかゝる『僧良寛歌集』が新潟の精華堂から出版されて居り、それから後に大宮季長氏の『良寛歌集』が東京の警醒社から出て居り、いづれも歌の數に於ては、以前の歌集に比べてすつと多くなつて居る。更に近年に至つて西郡久吾氏の『北越偉人沙門良寛全傳』出づるに及んで、その中に集められた良寛の歌は、實に長歌

四十九首、反歌二十八首、旋頭歌十一首、短歌五百七十二首、合計六百六十首の多数を示してゐる。吾々は實に此等の人々に對して、深い感謝を捧げなければならぬのである。

そこで今私が公にする『良寛和尚歌集』はと云ふと、それは云はゞ前記諸家の努力に成つたもの、増補訂正に過ぎないやうなものである。先づ以て私の土臺としたのは、前に擧げた牧江氏所藏の『沙門良寛師歌集』であつて、これに直接私自身が西浦原、三島兩郡地方の諸家に藏されてゐる良寛遺墨について或は新たに集め、或は古き刊行本の文字に訂正を加へなごしたものを、隨時書き加へたのである。そして今日までに集め得たところの歌の數は、短歌七百十首、長歌五十三首、反歌三十八首、旋頭歌十八首、合計八百十八首となつた譯である。併し私はこれを以て決して、私の良寛の歌

の蒐集を終つたとは思つてゐない。今後也能ふかぎりの機會を利用して、或は訂正を行ひ、或は増補をつゞけるつもりである。なほ又これは決して私達一人や二人の仕事でなくして、なるべく多数の人々の努力に俟たなければならぬ事だと思つてゐるのである。

□

次に良寛の詩の蒐集——これは不思議にも良寛自身の手許に詩稿やうのものが何かあつたらしい。その事はかの鈴木文臺の詩稿中に左の如き一篇があるところから、推定することが出来るのである。(西郷氏全傳六)

○寄良寛禪師禪師有詩稿、名草堂集、時請借文臺

北風何凜烈、霰雪交増寒、濁酒豈能敵、熾火猶恐千、猊坐其奈何、野生儘平安、當此三冬節、恬焉意緒寬、雪解春花舞、霰學跳玉丸、寂々白屋

裡、寥々息衆謹、手集砌下雪、活火煎月團、半夜窓外竹、風聲動珊々、  
夢斷布衾冷、燈殘曉光寒、日々又日々、聊更無慨嘆、想像山下居、幽致  
不可殫、雪比禪味淡、竹表苦節完、白布雲簷桂、蒼龍松庭蟠、巒峰爭呈  
潔、塵俗凡絶看、欲行敲禪扉、懷耻汗溥々、常讀老禪詩、護愛且好之、  
門牆豈所窺、聊吾意所師、冀欲借白雪、果宿志所期、豈其云久留、完璧  
月滿時、老禪幸許諾、莫笑我狂癡、忽因家兄行、草々陳鄙詞。

そして此の詩稿には長短合せて二百餘首が収録されてゐたことは、文臺  
の書簡によつて知ることが出来る。なほ西郡氏の『良寛全傳』によると、  
此の良寛の詩稿は、鈴木桐軒文臺兄弟の借覽し筆寫し愛誦したものであつ  
たが、良寛の寂後桐軒の子順亭が更に之を校訂し、且逸篇をも蒐集増補し  
草堂集又草庵集と題して、後世に傳へたので今日良寛の詩稿が世間に存在

することを得たのは、實に此の順亭の力多きによるものだとの事である。  
けれども鈴木順亭の校訂編輯した此の良寛詩稿と相並んで吾々の忘るべ  
からざるものは、上州前橋龍海院の藏雲和尚（號寒華子）が慶應年間に上  
梓した『良寛道人遺稿』と題したものである。而してこの書の出版を見る  
に至つた経路については、貞心尼の書翰がよくこれを説明してゐる。

「詩集一冊序文二通り、是は島崎へん證を申す法師年頃禪師としたしくいたし人にて、此度  
開版のこゝにつきわざく私方へ持参りいたされ候より、さし上御目にかげより詩は同じ事に  
候序文の事、仰の如く俗人または知らぬ者の書きたるは中々に徳をそんじ、さきには劣る事も  
御座候、されば君師の有徳を知りて其詩を開版し、世に長く殘さんと思召す御心ざしのふかき  
事何人が及ぶべき、さればいさゝかにも君の作文ならばなき主もさぞ御悦び、われもうれし  
うぞんじよりし。

尙々先年禪師知音の者共此詩を開版いたすべしと相談致し候處、鈴木氏も其仲間なりしや序文

を書き入れ給はんといひたりしに、人々うけあはず其事やみだりこの話それ故へん澄子綾瀬先生(綾瀬は龜田數彌のことである)をたのみ書きてもらひしこの事に候へども、是とてあまりよしさも思はれずさればいづれにても無き方が中々にましならむかこそんじより、

即ちこれによつて考へると、此の藏雲和尚刊行の詩集と同じ内容のものが島崎村遍澄と云ふ法師の手によつて編輯されてゐたらしい。おもふにこれらは又いづれもかの鈴木桐軒文臺兄弟が借覽し筆寫した詩稿と同一の詩稿の筆寫によつて出來たものであらう。而も刊行を以て廣く世間に良寛の詩を紹介した點に於ては、藏雲和尚の手によつて成つた『良寛道人遺稿』を以て、第一とせなければならぬわけである。念の爲めその序文を轉載して置くことにする。

#### 良寛道人遺稿叙

胡蘆藤種纏胡蘆、吁亦尙矣、往昔世尊正覺山前、因地一交迦葉、八萬衆

前、破顏微笑來、爪舐綿々胡蘆纏胡蘆、或得皮肉骨髓而纏之、或沒溺深  
阬而纏之、或過水喚叫而纏之、成棒下忍痛、或鄙鄙失唐步、西天東地、  
胡蘆纏胡蘆、遂到此土矣、北越良寛道人、蚤入圓通而纏之、東湧西沒、  
無往而不纏焉、後還故國、在林野纏、在朝市纏、在貧纏、在病纏、在憂  
患纏、在歡笑纏、造次纏、顛沛纏、云爲動靜、又無處丹、目爲遺稿、於  
是、人各起異同見、或爲詩之看、或偈看之、或爲詩偈一般之看、或爲歌  
謠頌頌之看、或又謂落韻嘖啞如幻陳言、豈足把玩乎者有之、或謂麤言細  
語皆歸第一、那可以巧而論乎者有之、又爲破砂盆當陽拈出、又爲木札美  
當處受用、議論紛然析裂多端、所謂三人見虎、已作三惑也、余既愛道人  
纏胡蘆、而又自得纏之二十年于此矣、慶應乙丑秋七月竊謀論之梓、今春  
剞劂告竣、蓋亦恐胡蘆離披終歸烏有耳、於是乎序、

慶應三年龍集丁卯春三月二十三日

秋叢菴主 寒華子 敬題

しかし、かくして苦心刊行された詩集も、時勢が時勢だけに、さう大して廣くは行き渡らなかつたし、又さう廣く行き渡らせるほど多くの部數も刷られなかつたであらうと思はれる。その點では、明治二十五年に新潟の小林二郎翁の手によつて蒐集され校訂されそして出版された『僧良寛詩集』が一番顯著な成績を挙げた。今日良寛の詩を云々する人は、大概此の小林氏『僧良寛詩集』のおかげを蒙つた人達である。これには長短合せて三百首近くが集められてゐる。最近には西郡氏の『沙門良寛全傳』中に、かの鈴木順亭によつて校訂増補されたと云ふ『草堂集又草庵集』を主にして、それに西郡氏自身の蒐集した十一首を加へたものが公にされた。以上數種

七〇

の良寛詩集——そのいづれの編者に對しても、吾々は歌集のそれに於けると同じく深く感謝しなければならぬ。

そこで今回私がこゝに歌集と併せて公にする『良寛和尚詩集』は、以上數種のものとはやゝ趣を異にした『良寛尊者詩集』と題された古寫本をもとにして、それを以上の異本と照合して多少の訂正を加へたり、増補をしたりして、更に私自身諸家に傳へられた良寛遺墨を涉獵して蒐集したものを附け加へて編んだものである。『良寛尊者詩集』は、前に挙げた『沙門良寛師歌集』と共に、私の郷里糸魚川町の牧江家に保存されてゐた同家先々代靖齋翁（良寛と親交のあつた阿部宗珍翁の弟）の筆寫にかゝるもので、卷尾に「慶應二丙寅仲春盡日寫功松醸館牧江氏藏書」としてある。而してその集には長短合せて二百首足らずの詩が集めてあるに過ぎなかつたけれども、私の増

七一

補の結果三百首に達した事は、私の大なる喜びとするところである。更にその校訂に關しては諸異本及び諸家所藏遺墨を参照したことは勿論、各方面の先輩識者についてそれ〴〵意見を求めたことも少なくなかつた。云ふまでもなく私はこれを以て良寛詩集の完全なものとは思つては居ないが、併し従來刊行されたものに比べて、多少たりとも面目を鮮やかにしてゐるものであることを信ずるのである。此の點に關しては私は私の爲めにその所藏の良寛遺墨を見せてくださった諸家、及びさまざまな點で私の蒙を啓いてくださった先輩識者諸氏の恩惠を決しておろそかに心得てはならない次第である。

## 良寛和尚歌集

久加美乃於保止乃一麻開能  
 比止都麻賀美都衣者天留  
 比遠加久之奈加貝都衣波止  
 理平春麻志女之都衣波  
 伊良加尔開一里止岐之久  
 尔志毛者界礼东毛本岐  
 久雪賀之勢波布付东毛  
 知波也布留加美能美餘  
 里一安里と氣良志向也  
 東都所久系美者代東の者

越後糸川上源太氏藏良寛長歌

# 良寛和尚歌集

## 短歌

□

山菅のねもころごろにけふの日を引きとめ見なむ  
 青柳のいと  
 春の日の早もくれなばさす竹の君はいなむといは  
 ましものを(人に)  
 まがきごし庭にはふりて雞はなくわれ鶯におとら  
 ましやと



むら肝の心はなぎぬ長き日にこれのみ園の林を見れば

日めもすにまことこすけり鶯もあかき白きの梅は咲くとも

鶯もいまだ鳴かねばみ園ふのうめもさかぬに我は來にけり(入へのかへし)

足びきのこの山里の夕月夜ほのかに見るは梅の花かも

打なびき春は來にけりわが園の梅の林にうぐひすのなく

梓弓春さりくればみそらよりふりくる雪も花とこそ見め

このごろの一日二日にわがやどの軒端の梅もいろづきにけり

うぐひすの聲をきゝつるあしたより春の心になりけるかも

〇 春かぜに軒はのうめはやゝ咲かむこよひのつくよ君とともにせむ

うめの花おいが心をなくさめよ昔の友はいまあらずに

心あらばたつねて來ませうぐひすの木づたひちら  
す梅の花見に

このゆふべ寝さめてきけはかりがねも天津み空を  
なづみ行くらむ

聲立てしなけやうぐひすわが宿のうめのさかりは  
常ならなくに

うぐひすはいかにちぎれる年のはにきゐてなきつ  
る宿のうめかえ

霞立つながき春日にうぐひすのなく聲きけば心は  
なぎぬ

風ふけばいかにせむとかうぐひすの梅のほつえを  
こづたひてなく

薪こりこの山かげに斧とりていくたびかきくうぐ  
ひすの聲

世の中をうしとおもひてうぐひすは常世の國につ  
れていぬらむ

霞立つながき春日をこのやどにうめの花見てくら  
しつるかも

うめの花こよひの月にかざしては春はすぐともな  
にか思はむ

この園のうめのさかりとなりけり、わが老いらくの時にあたりて  
梅のはな折りてかざしていそのかみ古りにしことをしぬびつるかも  
わが園のうめの一ふさのこりけり春のなごりをあはれめよきみ

彌生の十日ばかり飯こふさて眞木山ちふに行きて有則が家のあたりをたづねれば今は野  
らさなりぬ、一木の梅の散りかゝりたるを見て古を思ひ出でてよめる

その上は酒にうけつるうめの花つちにおちけりいたづらにして

梓弓はるの山べにこどもらと摘みしかたこをたべ  
ばいかゞあらむ  
はちの子にすみれたんぼほこきませて三世みよの佛に  
たてまつりてむ  
飯こふどわが來しかども春の野にすみれつみつ  
時をへにけり  
春がすみ立ちにし日より山川に心はどほくなり  
けるかな(春の歌さて定珍とよめる)  
春の野に咲けるすみれを手につみてわがふるさを  
をおもほゆるかな

おしなべて緑にかすむ木の間よりほのかに出づる  
弓はりの月  
春の野のかすめる中をわがくれば、をち方里に駒ぞ  
いなゝく  
しきたへの袖ふりはへて春の野に莖をつみしこと  
もありしか  
足び木のをのへに立てる松柏今ははるべと打ちか  
すみけり  
足ひ木のよもの山べにはた馳せむ春の心ぞあきご  
ころなき

ももごりの木づたひてなくけふしもぞさらにやの  
まむ一つきの酒  
ひさかたの空てりわたる春の日はいかにのぞけき  
ものにぞありける

やまひのつこもりの夜はらからつどひてよめる

まろゐしていざあかしてむあづさ弓春はこよひを  
かざりと思へば

本覺院につどひてよめる

山ぶきの花をたをりて思ふごちかざす春日はくれ  
すともがな

山ぶきのちへをやちへに重ねともこの一はなの一  
重にしかず(二花は心花なり)

山ぶきの花のさかりにわがくればかじかなくなり  
此の川のべに

蛙なく野邊の山ぶき手折りつゝ酒にうかべてたの  
しきをへめ

百どりの鳴く山里はいつしかも蛙のこゑとなり  
けるかな

山ぶきの花のさかりはすぎにけりつれなき人(ふる  
さと人)を待つとせしまに

春とあきいづれこひぬとあらねどもかはづなく頃  
山ぶきの花

かぐはしき櫻の花の空にちる春の夕はくれずもあ  
らなむ

かすみ立つ長き春日を(に)子供らと手毬つきつゝ此  
日くらしつ

月よめばすでに彌生となりにけり野べの若なもつ  
ますありしに

久かたの雲ゐの上になくひばり今は春べとかどぬ  
ちになく

天も水もひとつに見ゆる海の上に浮び出でたる佐  
渡が島山

む月のはしめつ方渡部のはふりがもとに宿りてつとめて宮に詣でたりけるに雪の面白う  
林にかかりたるを見てよめる

さくらばなちるかどばかり見るまでにふるはたま  
らぬ春のあわ雪

このみやの宮のみさかに出てたてばみ雪ふりけり  
いつかしか上に  
あさなつむ賤が門田のたのおもに千鳥なくなり春  
にはなりぬ

こどもらと手たづさはりて春のぬにわかかなをつめ  
ばたぬしくあるかも  
春のぬにわかかなつめごもさす竹の君とつまねば籠  
にみたなくに  
春のぬにわか菜つみ来て雉子の聲きけば昔のおも  
ほゆらくに  
ゆくりなく我れ來にけらし春のぬのわかになつみつ  
つ君が家居に  
墨染のそでふりはへて春のぬにすみれをつみしこ  
どもありしか

久方の雨のはれまに出て見ればかすみわたりぬ四  
方の山々

春の日のうみのおもてを見わたせば霞に見ゆるあ  
まのつりふね

わがやどの軒はの峰を見わたせばかすみにちれる  
山櫻かな

下よりも上の高ねをながむればかすみのうちにや  
ざる小櫻

このやどにこしくもしるしうめの花けふはあひ見  
てちらばちるども

おしなべて〇〇〇にかすむこの間よりほのかに見  
るはうめの花かも

ちんはそにさけにわさびにたまはるは春はさびし  
くあらせじとなり(阿部氏におくれる)

佐渡がしま山はかすみのまゆひきて夕日まばゆき  
春のうなはら

うめの花散るををしけんうくひすの聲のかぎりは  
このそのになけ

いざわれも浮世の中に交りなむこそそのふるすをけ  
ふ立ち出でて

かりそめにわがこしかどもこのそのゝ花に心をうつしつるかも

ふる里に花を見て

なにこどもうつりのみ行く世の中に花はむかしの春にかはらず  
山さどにさくらかさして思ふどちあそぶはる日は  
くれすともよし  
うつそみの人もすすさめぬ深山木も春には花のさくてふものを

いのちあらば又のはるべに來ゐて見むながめもあかぬ山の櫻を

久かたのあまきる雪と見るまでに降るはさくらの花にぞありける

いざこども山邊に行かむさくら見にあすともいはばちりもこそせめ

いざこども山べに行かむすみれ見にあすさへ散らば如何にとかせむ

この里の桃のさかりに來て見ればながれにうつるはなのくれなる



春の夜のおぼろつくよのひと時をたがさかしらに  
あたひつけゝむ  
あしひきの片やまかげの夕つくよほのかにみゆる  
山なしの花  
あづさ弓はるはそれともわかぬまにぬべのわか草  
そめいづるなり  
この園のやなぎのもとにまとゐしてあそぶこの日  
はたのしきをへめ  
春風のやなぎのもとにまとゐしてあそぶけふしも  
こゝろのどけき

みづかしはわがどめゆけばあつさ弓はるのぬすゑ  
にうかぶかげろふ  
むらぎものこゝろたのしも春の日にどりのむらが  
りあそぶを見れば  
あしひ木の國<sup>くに</sup>上の山<sup>やま</sup>のやまぶきの花のさかりにと  
ひし君はも  
草のいほに足さしのべて小山田の山田のかはづき  
くがたのしさ(きかくよろしも)  
あしひ木の山田のたゐになくかはづこゑのはるけ  
きこの夕べかも

を山田の門田の田居になくかはづこゑなつかしき  
このゆふべかも  
はるさめのふりしゆふべは小山田にかはづなくな  
りこゑめづらしも  
あしひ木の山田のはらにかはづなくひとりぬるよ  
のいねらえなくに  
霞立つなかき春日にこどもらとあそぶ春日はたの  
しくあるかな  
こどもらと手まりつきつゝこの里に遊ぶ春日はく  
れずともよし

この宮のもりのこしたにこどもらと手まりつきつ  
つぐらしぬるかな  
この宮のもりの木下にこどもらとあそぶ春日はく  
れずともよし(和亭の晝の讀)  
みちのへにすみつみれつゝ鉢の子をわがわするれ  
ごさる人はなし  
みちのべにすみれつみつゝはちのこを忘れてぞこ  
しその鉢の子を  
みちのべにすみれつみつゝはちのこをわが忘れて  
ぞ來しあはれ鉢の子

うめがえに花ふみちらすうぐひすの鳴くこゑきけ  
ば春かたぶきぬ  
この宮のみさかに見れば藤波の花のさかりになり  
けるかも  
あしび木の國<sup>く</sup>上の山のほとゝぎすよそにきくより  
あはれなりけり  
あしび木の國上の山のほとゝぎす今をさかりとふ  
りはへてなく  
あしび木の國上のやまをこえくれば山ほとゝぎす  
をちこちになく

はらくと降るは木の葉のしぐれにて雨をけさき  
く山さとのいほ  
木のはちる森の下やはききわかすしぐれする日も  
しぐれせぬ日も  
秋もややうらさひしくぞなりにけるを笹にあめの  
そそぐをきけは  
秋さめの日にくふるにあしひきの山田のをちは  
おくてかるらむ  
はるるかと思へはくもる秋のそらうき世の人の心  
しれどや

はだ寒み秋もくれぬと思ふかなこの頃たえてむし  
のねもなし  
あしひ木の國上の山のもみぢ葉をたをりてそ來し  
あめのはれまに  
ゆく秋のあはれをたれにかたらしあかさ籠にい  
れかへるゆふぐれ  
この岡につま木こりてむ久方のしくれの雨の降ら  
ぬまぎれに  
水や汲まむたききやこらむ菜やつまむ秋のしくれ  
のふらぬそのまに

柴やこらむしみづやくまむ菜やつまむしくれの雨  
のふらぬあひだに  
いひこはむましばやこらむ苦しみづしくれの雨の  
降らぬまに  
いひ乞ふと里にも出でずこのころはしくれの雨の  
まなくし降れは  
いにしへを思へばゆめかうつつかもよるはしくれ  
の雨をききつつ  
よひやみに道やまとへるさを鹿のこの岡をしも過  
ぎかてになく

秋の雨のはれまに出でて子どもらとやちまたされ  
ばものすそぬれぬ  
あまの川かはへ(又、川瀬)のせきやきれぬらしことし  
の年はふりくらしつつ  
しくれの雨まなくしふれはわがやどはちどの木の  
葉にうつもれぬらむ  
あしひきの山田のくろになく鳴の聲きくときぞ秋  
はくれける  
なほさりに日をくらしつつ新田實のことしのあき  
もくらしつるかも

君まさばめでて見るらしこの頃は手向くる花も露  
ばかりにて  
わすれてはおどろかれけりもみちはのさきを争ふ  
世とはしりつつ  
もみち葉のさきをあらそふ世の中に何をうしとて  
袖ぬらすらむ  
あきの夜はながしといへどさす竹の君とかたれば  
おもほえなくに(定珍に)

夜もすから草のいほりにわれをれは杉の葉しぬき  
あられふるなり  
わかいはは國上山もとふゆこもりゆききの人のあ  
とさへぞなき  
小夜ふけて(又、ふけぬ)門田のくろになく鴨のはがひ  
の上に霜やおくらむ  
あしひきの山田のたゐになくかものこゑきくとき  
ぞふゆは來にける  
世をそむく苔の衣はいとせまし柴をたきつつ夜を  
あかしてむ

山かけのくさのいほりはいとさむししばをたきつ  
つ夜をあかしてむ  
うつみ火もややしたしくぞなりにけるをちの山へ  
に雪やふるらむ  
み山へに冬こもりするおいのみを誰かどはまし君  
ならなくに(以下三首定珍に)  
たまさかに來ませる君をさよあらしいたくな吹き  
そ來ませる君に  
たにのこゑみねのあらしをいとはずはかさねてた  
とれ杉のかけ道

いまよりはつぎて白ゆきつもらましみちふみわけ  
てたれかどふべき  
今よりはふるさと人のおともあらしみねにもをに  
もつもる白ゆき  
しらゆきの日ことにふれはわか宿はたつぬる人の  
あとさへそなき  
久方の雲居をわたる雁かねもはね白たへに雪やふ  
るらむ  
草のいほにねさめてきけは足ひ木の岩根におつる  
瀧つせの音

わか宿の淺ちおしなみふる雪のけなばけぬべきわ  
がおもひかな  
ひさ方の天きる雪のふる日には杉の下いほ思ひこ  
そやれ  
風ませに雪はふりけりいつくよりわがかへるさの  
道もなきまで  
くつなくて里へも出てすなりにけりおぼしめしま  
せ山すみの身を  
みゆきふる片山かけのゆふくれはこころさへにぞ  
きえぬべらなる

しばの戸の冬のゆふべのさひしさをうきよの人に  
いかてかたらむ  
いひこふと里にもいですなりにけりきのふもけふ  
も雪のふれれば

山かけのまきのいたやに音せねどゆきのふる夜は  
さむくこそあれ

かきくらしふる白ゆきを見ることにむろのたかね  
のむかしおもほゆ

白ゆきはいくへもつもれもろこしのむろのたかね  
をうつさむとおもふ

のきもにはもふりうづめけるゆきのうちにいやめ  
づらしき人のおとつれ

このゆふへいはまのたきつ音せぬはたかねのみゆ  
きつもるなるらし

さよふけてたかねのみゆきつもるらしいはまにた  
きつおとだにもなし

むら肝の心かなしもあら玉のこどしのけふもくれ  
ぬとおもへば

よの中にかしはらぬ身とおもへども暮るるはをし  
きものにそありける



このころの夜のやみぢにまごひけりおなたの山に  
入る月を見て  
國上山杉の下道ゆきならしあとふみつけて歸り去  
れ君  
ふる雪に年をまがひて梅さきぬ香さへ散らすば人  
知るらめや  
古志に来てまだ古志なれぬ我なれやうたて寒さの  
肌にせちなる  
おしなべて山にも野にも雪ふりぬきえざるをりは  
○○にてあるべし

来て見ればわがふるさとはあれにけり庭もまかき  
も落葉のみして  
冬なからよの春よりもしつけきは雪にうもれし越  
の山里

□

み佛のしろしめしけんいにしへを今にうつして見  
るがたふとさ  
不可思議のみだのちかひのなかりせば何をこの世  
の思ひ出にせむ  
やちまたにもものな思ひそみた佛のもとのちかひの  
あるに任せて

われながらうれしくもあるか彌陀佛のいますみ國  
に行くと思へば  
浮草の生ふるみぎはに月かげのありとはここにた  
れか知るらむ  
のりの道まことわかたむ西ひがし行くもかへるも  
波にまかせて  
心もよ言ばもとほくとゝかねばはしなくみ名をと  
なへこそすれ  
水の上にかずかくよりもはかなきはみのりをはか  
る人にぞありける

すみ染のわが衣手はぬれぬともりの道しばふみ  
わけて見む  
わかれにし心のやみに迷ふらしいづれか阿字の君  
がふるさと  
僧の身はまことはいらずぎやう不行ぼさちののり  
ぞ殊勝なりける  
たゞ頼む三がい六道の田長來てみつ瀬の川になき  
わたるかな  
あわ雪の中に立ちたる三千大千世界又そのなかに  
あわ雪ぞふる

本願を信する人の爲めに

おろかなる身こそなか／＼うれしけれ彌陀のちか  
ひにあふと思へば  
いかなるが苦しきものと問ふならば人をへだつる  
心とこたへよ  
世のなかのほたしを何と人間はとたづねきはめぬ  
心と答へよ  
たりきとは野中にたてし竹なれやよりさはらぬを  
他力とぞいふ

われありと頼む人こそはかなけれゆめのうき世に  
まぼろしの身を  
今よりはなにに頼まむ方もなし教へてたまへのち  
の世のこと  
渡しにし身にしありせば今よりはかにもかくにも  
みだのまに／＼  
ありそみの上に朝ごと立つ市のいよく行けばい  
よ／＼消にけり(伊達婆城)  
わすれても人なあやめそましらもよ汝れもむくい  
はありなむものを

いかにしてまことの道にかなひなむ千とせのうち  
の一日なりとも

何故に家をいでしとをりふしは心にはちよすみぞ  
めの袖

すてし身をいかにとはゞ久方の雨ふらばふれ風ふ  
かばふけ

のりの道まことは見えで昨日の日もけふも空しく  
くらしつるかな

のりの塵にけがれぬ人はありときげごまさまめに一  
目見しことあらず

さしあたりそのことばかりおもへたと歸らぬ昔し  
らぬ行くする

□

貞心尼への贈答歌

ゆめの世にかつまごろみて夢をまたかたるも夢も  
それがまにまに

心さへかはらざりせばはふ鳶のたえず向はむ千代  
も八千代も

又もこよしばの庵をいとはずば薄尾花の露をわけ  
わけ

君やわする道やかくるるこのころは待てどくらせ  
ど音づれのなき  
身をすてゝ世をすくふ人もますものを草のいほり  
にひまもとむとは  
久方の月のひかりのきよければてらしぬきけりか  
らもやまども  
昔も今もうそもまこどもはれやらぬ峰のうす雲、た  
ちさりて、のちの光ど、おもはずやきみ  
天が下にみつる玉よりこがねより春のはじめの君  
が音づれ

手にさはるものこそ無けれのりの道それがさなが  
らそれにあるせば  
み山べのみ雪とけなば谷川によごめる水はあらし  
とぞおもふ  
いざさらば我もやみなむこゝのあまり十つつ十を  
もゝと知りなば  
りやうせんの釋迦のみ前にちぎりてしことなわす  
れそ世はへだつとも  
かりそめのことゝおもひそこのことば言の葉のみ  
どおもほゆな君（聲韻の事を語りて）

浮くもの身にしありせば時鳥しばなく頃をいづこ  
にまたむ

秋はぎの花さく頃は来て見ませいのちまたくば共  
にかざさむ

みあへする物こそなけれをがめなる蓮の花を見つ  
ゝしのばせ

つきて見よ一二三四五六七八九の十とをどをさめ  
てまたはしまるを

極らくのはちすの花の花びらをわれにくやうす君  
がしんつう

いざさらばはちすの上のうちらむよしやかはづ  
と人はいふとも

くさぐさのあやおり出す四十八もじこゑとひゞき  
をたてぬきにして(五韻を)

いづこへも立ちてを行かむあすよりは鳥てふ名を  
人のつくれば

いざなひて行かば行かめぞ人の見てあやしめ見ら  
ばいかにしてまし

いざさらばわれはかへらむ君はこゝにいやすくい  
ねよ早あすにせむ

歌やよまむ手毬やつかむ野にやいでむ心ひとつを  
定めかねつも  
秋はぎの花のさかりも過ぎにけり契りしこともま  
だとけなくに  
梓弓春になりなば草のいほをどくでゝきませあひ  
たきものを  
いつくそ待ちにし人はきたりたり今はあひ見て  
何かおもはむ  
むさしのゝ草葉のつゆのながらへてながらへはつ  
る身にしあらねば

□  
水莖の跡は涙にかすみけり有りし昔のことを思へ  
は(父以南の「朝霞に一段ひくし合歡の花」  
はさある半折の餘白に書き添へしうた)  
朝ぎりのなかに君ますものならばはるゝまにまに  
うれしからまし

□  
あかほてふところにて天神の森にやどりぬき夜ふけて嵐のいと寒う吹きたりければ  
山おろしいたくなふきを墨染の衣かたしき旅ねせ  
る夜は

高砂の尾の上の鐘の聲きけば今日のひと日はくれ  
にけるかも

次の日は唐津てふ所に至りぬこよひも宿のなかりければ

思ひきや路の芝草をりしきてこよひも同じかりね  
せむどは

□

○ 西行法師の墓に詣てし花を手向けてよめる

たをりこし花の色香はうすくともあはれみたまへ  
心ばかりは

高ぬのみ寺にやどりて

きの國の高ぬのおくの古寺に杉のしづくをききあ  
かしつゝ

□

すめらきの千代萬代のみよなれや花の都にこどの  
はもなし

難波津のよしや世の中梅の花むかしを今にうつし  
見るかな

浦かせも(濱かせよ)心して吹け千早振神の社にやど  
りせし夜は



浦波のよするなぎさを見わたせば末は雲井につ  
く海原  
故さとへ行く人あらば言つてむけふあふみぢを我  
れこえにきと  
草枕旅ねしすればぬは玉のよはの嵐のうたてさむ  
きに  
都鳥隅田川原になれすみてをちこち人に名やとは  
るらむ  
ふる郷をはるく出て、武藏野のくまなき月をひ  
どり見るかな

旅ころも野山をこえて足たゆくけふのひと日もく  
れにけるかな  
草まくら夜ことにかはる宿りにも結ふは同じふる  
さとのゆめ  
いめの世に又いめむすび草まくらねざめ淋しく物  
思ふかな

□

神嘗月の頃簑一つきたる人の門に立ちて物をひければ古きぬぎてとらせぬ其の夜  
嵐のいと寒く吹きたりければ

いづこにか旅ねしつらむぬは玉のよはのあらしの  
うたてさむきに

住むところ求めにきて嵯峨へ行く人よみてつかはしける

ことさらに深くな入りそ嵯峨の山たつねていなむ  
道の知れぬに

□

○ 子どものみまかりたる親の心にかはりて

梓弓春を春どもおもえす過ぎにし子らか事をおも  
へは

去年の春をりて見せつる梅の花今は手向となり  
けるかも  
人の子の遊ぶを見ればにはたつみ流るゝ涙とゝめ  
かねつも

から衣たちてもゐても術ぞなきあまのかるもの思  
ひみだれて

こぞはいもかきにて子どものさはにみまかりたりけりその親にかはりて

子を思ふ思ふ心のまゝならばその子に何の罪をお  
はせぬ

子を思ひすべなき時はおのが身をつみてこらせど  
猶やますけり

新たまの年はふれども面かげの猶めのまへに見ゆ  
る心か

今よりは思ふまじどは思へども思ひ出してかこち  
ぬるかな  
思ふまじ思ふまじどは思へども思ひいだして袖し  
ぼるなり

哀傷の心のうたをよみて

彌彦やひこのを峰うちこすつゝらをりつゝやはたちをか  
ざりどはして  
丈夫やともなきせじとおもへどもけぶり見る時む  
せかへりつゝ

十日あまりいつかは來むと平坂をこゆらむ子らか  
おどつれもなし

老人のなげかすをききて

日ぐらしのなく夕方はわかれにし子のことのみぞ  
おもひいてぬる  
老い人は心よわきものぞみこゝろをなくさめたま  
へ朝な夕なに

雪のふるを見て主人にかはりて

しらゆきはちへにふりしけわがかごにすぎにし子  
らがくるといはななくに

□  
今更にここの八千度くやしきはわかれし日よりど  
はぬなりけり(光枝うしのみまかりたまひぬとききて)  
なにこどもみなむかしとぞなりにけるなみたばか  
りやかたみなるらむ(光枝うしの世をすくさせたまふとききて)  
なにこどもみなむかしとぞなりにけるはなになみ  
たをそしくけふかな  
さむしろにころもかたしきよもすがらきみとつき  
みしこどもありしか(靈前に花をたむくるきて)

此の里のゆき來の人はあまたあれど君しなければ  
さひしかりけり(ともかきのみまかりしころ)

幼き頃よりねもころに語りひし人ありけり、田舎をすみわびて吾妻の方へいけれど、  
此方よりもかなたよりもひさしくおとづれもせでありしに、この頃みまかりぬとき  
て

かゝらむどかねて知りせは玉杵の道行人にこどつ  
てましを  
此のくれのうら悲しきに草枕たびのいほりにはて  
し君はも

友がきのみまかりて又春へ物へまかる道にてすきて見れば住む人なくて花は庭に散  
りみだれてありければ

おもほえず又此の宿にきつるかな有りし昔のこゝ  
ろながらに

□

おなしくはあらぬ世までもともにせむ日は限あり  
ことはつきせじ

世の中に同じ心の人もかな草のいほりに一夜かた  
らむ

しるしらぬ行くもかへるもゝろどもにわがふるさ  
とにいくといはまし

わが袖はしとくにぬれぬうつせみのうき世のなか  
のこをおもふに

もどゝりにつしめるうたのひさにあるをいまやあ  
くらむその時にもか

あら金の土のなかなる埋れ木の人にも知らでくち  
はつるかも

おく山の草木のむたにくちぬどもすこしこのみを  
またや〇〇たむ

手をとりて昔の友をかそふれはなきはおほくそな  
りにけるかな

いとはやき月日なりけりいとはやく年はくれけり  
われ老いにけり  
今よりはのにもやまにもましりなむ老のあゆみの  
ゆくにかせて  
なきをりはなにをよすかにおもはましあるになら  
ひしけふのこゝろは  
おもほえずおくれさきたつ世の中をなげきやはて  
むはるはへぬとも  
かたらずにあるへきものをことくくに人の子ゆゑ  
にぬるゝそでかな

里人のしきりにみまかりける頃

忘れてはおどろかれけりもみち葉のさきをあらそ  
ふ世とは知らずて

□

ナギにし人の事をかにもかくにも忘れぬさきて、かくなむ。

おみの子をおしとおもはゝみたからをうちはふら  
さすいつくしみませ(阿部氏に)

しろしめす民があしくばわれからと身をながめて  
よ民があしくは(解良氏に)

うちわたすつかさつかさにものまをすもこのこゝ  
ろをわすらすなゆめ

をちこちのあがたつかさにも申すもとの心をす  
つるなよ君  
いくそたびぞうつのみてもておほみかみにぎりま  
しけむうつのみてもて

□

天雲のよそに見しさへ悲しきにをし足らはせし父  
のみこはも  
幾とせかたのみし人もあたしぬの草葉の露となり  
にけるかも

千代かけてたのみし人もあたしぬの草葉のつゆと  
なりにけらすや

□

ゆくさくさ見れともあかず石瀬なる田中に立てる  
一つ松がえ

霞たつ沖見の嶺の岩つゝじ誰がおりそめじからに  
しきかも(刈羽郡妙法寺妙見嶺にて)

松の尾の松の間を思ふとちありきしことは今もわ  
すれす

あしひ木の黒坂山の木のまよりもり来る月をよも  
すがら見む  
音にきく比曾の山べのもみぢ見に今年はゆかむ老  
いのなごりに  
我はもよいはひを居らむ平らけく小山田櫻見てか  
へりませ(以下二首由之に)  
小山田の山田の花を見む日には一とえたおくれ風  
のたよりに

□

國上山岩のこけ道ふみならしいくたびわれはまる  
りけらしも  
わがやどは國上やまもどこひしくはたつねて來ま  
せたどりくくに  
こひしくはたつねて來ませ足ひ木の國上の山の森  
の下いほ  
足ひ木の山たちかくす白くもはうきよをへだつせ  
きにてこそあれ  
足ひ木のわがすむ山は近けれど心とほくもおもほ  
ゆるかな



雨はやみぬこの夜あけなはこしたのやいはのこけ  
みちうちはらひてむ

山かけの岩ねもりくる苔みづのあるかなきかに世  
をわたるかな

わかいははもりの下いほいつとてもあさちのみこ  
そおひしけりつゝ

國上山杉の下道ふみわけてわかすむいほにいさか  
へりてむ

たきつせのおときくばかりいほしめてうきしらく  
もによはおくりてむ

わがやとはこしの奥山こひしくはたつねて來ませ  
杉の下みち

くかみ山杉の下道ゆきふかしあとふみつけてかへ  
りされ君

いさこゝに我身は老いむあしひ木の國上の山の松  
の下いほ

足ひ木の山邊にをれはすべをなみしきみつみつゝ  
けふもくらしつ

足ひ木の山のしきみやこひくらし我も昔のおもほ  
ゆるらむ

足ひ木の山のしきみをこひつらむ我も昔のおもほ  
ゆらくに

○里べにはふえや太鼓のおとすなりみ山はさはに松  
の音しつ

□

阿部定珍翁の唱和及び贈答のうた

心あらば草のいほりにとまりませ昔の衣はいとせ  
まくとも

山里のさひしさなくはこと更に來ませる君になに  
をあへまし

山里の冬のさひしさなかりせは何をか君があへ草  
にせむ

雨はれにもものすそぬれてこしきみを一夜こゝにと  
いはばいかゝあらむ

君きませ雪はふるともあどどめむ國上のやまの杉  
の下みち

あしひ木の國上の山の山はたにまきし大根をあさ  
ずをせ君

われもおもふ君もしかいふこの庭に立てる槻の木  
いとふりにけり

わすれてはわがすむ宿とおもふかな杉のあらしの  
たえずしふけは(阿部家にやどりて)  
つのかにのなにはのことはいさしらすこのしたや  
とに三たりふしたり  
うきくものまつこともなき身にしあれば風の心に  
まかすべらなり  
うき雲のまつ事もなき身にしあればとゝむとゝめ  
ぬ風のまにく  
なほさりにそとにでて見れば日はくれぬ又たちか  
へる君がやかたに

あしび木の國上の山をいまもかも鳴きてこゆらむ  
山ほとゝぎす  
ほとゝぎすわがこと山にはふりこむこひしきこと  
におとつれはせよ  
ほとゝぎす聞かずなりけりこのころは日にけにし  
げき事のまぎれに  
ほとゝぎすしきりに啼くと人はいへどわれはきか  
ずもなりにけるかも  
ほとゝぎすわがすむ宿はおほかれとこよひのかは  
つましめづらしも(阿部氏宅にて)

夏やまをわがこえくればほとゝぎすこぬれ立くき  
なきはふく見ゆ  
夏やまをこえてなくなるほとゝぎす聲もはるけき  
このゆふべかな  
ほとゝぎす汝がなく聲をなつかしみこの日くらし  
つその山のへに  
こゑ立てゝ鳴けほとゝぎすことさらにたつね來る  
る心しりなば  
あを山の木の間立ちくきほとゝぎす鳴くこゑきけ  
は春はすぎけり

いつちへか鳴きてゆくらむほとゝぎす小夜更け方  
にかへるさの道  
久方の雨にぬれつゝほとゝぎす鳴く聲きけは昔お  
もほゆ  
ほとゝぎすいたくな鳴きそさらたに草のまくら  
はさひしきものを  
うきくもの身にしありせはほとゝぎすしは鳴く聲  
をいづこにまたむ

あひつれて旅かしつらむほどゝぎす合歡の散るま  
でこゑのせさるは

しのひ音をいづこの空にもらすらむまつま久しき  
山ほどゝぎす

花はちる訪ふ人はなし今よりは夏木立のみおひし  
けるらむ

わがいほは森の下いほいつとても青葉のみこそ生  
ひしけりつつ

○五月雨のはれまに出でてながむれば青田すすしく  
なりにけるかも

朝つゆにきほひて咲けるはちすはのちりにはしま  
ぬちりにしまざる)人のたふとさ

なつくさはこころのままにしけりけりわれいほり  
せむこれのいほりに

秋はきの咲くを遠みと夏草のつゆをわけく(ぬれ  
つつ)とひし君はも(真心尼におくる)

○朝夕のつゆをなさけの秋近み野へのなてしこさき  
そめにけり

旅人にこれをきけとやほとゝぎす血に鳴く涙かわ  
かざりけり

せみのはのうすきころもをきませればかげだに見  
えてすすしくもあるか

たまはこのきりのかげみちすすしさにわがたちに  
けりそのかげみちに

わが親に花たてまつらしよ何花を天竺てらすほう  
蓮花の花

なへくゝとわが呼聲は山超て谷のすそこえ越後挿  
秋の

またれにし花はいつしかちり過ぎて山は青葉にな  
りにけらしも

五月雨の雲間をわけてわかれば経讀鳥と人はい  
ふらむ(定珍へのかへし)

よもきのみしけりあひぬるわか宿はたづぬる人も  
道まよふらし

うゑあふしききてむとくにゆきて見むきみかみそ  
ののさゆり根のはな

わが待ちし秋は來にけり高さこのをのへにひひく  
日くらしの聲  
わが待ちし秋は來ぬらしこのゆふへ草むらことに  
蟲の聲する  
このゆふへ秋は來ぬらしわがやどの草のまがきに  
むしぞ(又、むしの)なくなる  
あはれさはいつはあれともくすのはのうらふきか  
へすあきのはつ風  
秋風を待てはくるしも川のせにうちはしわたせの  
川のせに

わが待ちし秋は來にけり月くさのやすの川原に咲  
きゆく見れば  
ねもころにたつねて見ませ久方の天の川原はいつ  
こなるかど  
わが宿をいづくと問はゞ答ふへし天の川原のはし  
のひがしど  
み草かりいほり結はむ久方の天のかはらのはしの  
ひかしに  
天の川やすのわたりは近けれとあふよしはなし秋  
にしあらねは

秋風に赤裳のすそをひるかへしいもが待つらむや  
すのわたりに  
ふして思ひ起ちてながむるたなはたのいかなるこ  
とのちきりをかする  
いかならむえにしなればかたなはたの一夜かきり  
てちきりそめけむ  
人の世はうしとおもへどたなはたのためにはいか  
にちきりおきけむ  
白たへの袖ふりはへてたなはたの天の川原にいま  
そたつらし

今もかもたなはたつめは久方のあまの川原に出て  
て立つらし  
戀ふる日はあまたありけりあふどいへはそこそと  
もなくあけにけるかも  
まつどいへはあやしきものそけふの日の千とせの  
こどもおもほゆるかな  
久方のあまの川原のわたしもりはや舟出せよ夜の  
更くるかに  
久方のあまの川原のわたしもり川なみ高しこころ  
せよかし



わたしもり早ふねいたせぬは玉の夜きりは立ちぬ  
却はのせ毎に  
秋のぬの萩のはつ花咲きにけりをのへのしかのこ  
ゑまちかてに  
はぎの花咲くらむ秋の遠みとて來ませる君かいく  
らうれしき又、こころうれしき  
飯こふとわれこのやとにすきしかははきのさかり  
にあひにけらしも  
飯こふと我來にけらしこの園のはきのさかりにあ  
ひにけるかも

白つゆに咲きれ亂たる萩か花にしきをおれる心ち  
こそすれ  
秋はぎの枝もとををにおくつゆをけたすにあれや  
見む人のため  
はきがえにおく白つゆの玉ならばころものうらに  
かけてゆかましを  
はぎが花いまさかりなりひさ方の雨はふるともち  
らまくはゆめ  
夕かせになびくやそののはぎが花なほもこよひの  
月にかささむ

ちりぬらはをしくもあるか萩の花こよひの月にか  
さしてゆかむ  
秋萩の花さくころは君きませいのちまたくはいさ  
かさしてむ  
わがいほは君かうらはたゆふされはまがきにすた  
く蟲のこゑぐ  
玉杵のみちまどふまでにあきはき<sup>け</sup>ちりにけるかも  
ゆく人なしに  
秋山のもみちはちりぬ家つとに子らがこひせばな  
にをしてまし

秋風にちりみたれたるはきの花はらはとをしきも  
のにそありける  
をみなへし秋はきの花さきにけりけさのあさけの  
つゆにきほひて  
秋のぬをわがわけくれば朝ぎりにぬれつゝたてり  
をみなへしの花  
白つゆにみたれてさける女郎花つみておくらむそ  
の人なしに  
このやどの一もとすゝきなつかしみ穂にづるあき  
はとめてわが來む(わたへの月花亭にて)

あきの日にひかりかかやくはなすすきここのおに  
はにたたして見れば  
あきの日にひかりかかやくすすきの穂これの高屋  
にのほりて見れば  
ゆきかへり見れどもあかずわがいほのすすきがう  
へにおける白つゆ  
秋のぬのをはなにおける白つゆを玉かどのみそあ  
やまたれける  
秋のぬのを花にましるをみなへし月のひかりにう  
つしても見む

夕かせに露はこほれて花すすきみたるる方に月を  
いざよふ  
秋風になびくやまぢのすすきのほ見つつ來にけり  
きみが家邊に  
あしひ木の山のたをりにうちなひくを花たをりて  
君がいへ邊に  
またも君しばのいほりをいとばすすきを花を  
わけてとひませ  
またも來よ草のいほりを忘れずばすすき尾花のつ  
ゆをわけわけ

秋風のを花吹きしくゆふくれは渚によするなみか  
とぞおもふ  
このをか秋はぎすすきたをりてむわがころもで  
の香はしまむとも  
このをか秋はぎすすき手をりもて三世みよのほとけ  
にたてまつらはや  
わかいはの垣ねにうゑし八千草の花もこのころさ  
きそめにけり  
秋のぬの草はのつゆを玉と見てとらむとすればか  
つきえにけり

秋のぬのくさむら毎におくつゆはよもすがらなく  
むしの涙か  
しら露にさきたる花をたをるとて秋の山ぢにこの  
日くらしつ  
ねもごろに我を招くかはたすすき花のさかりにあ  
ふらくおもへば(阿部氏かりにて)  
秋の野のすすきかるかやふちはかま君には見せつ  
散らばちるとも  
ゆめならばさめても見まし萩の花けふの一日はち  
らすやあらなむ

いひこふとわが来て見れば萩の花みぎりしみみに  
さきにけらしも  
うば玉の夜のやみちにまとひけりあなたの山に入  
る月を見て  
秋のよもややほださむくなりけりひとりやさび  
しあかしかねつも  
秋もやや衣手さむくなりけり草のいほりをいさ  
とさしてむ  
秋の夜もややほださむくなりけりひとりやきみ  
があかしかぬらむ

あきのぬの千草ながらに手折りなむけふのひと日  
はくれはくるとも  
秋のぬの千草ながらにあだなるを心にそみてなご  
おもひける  
秋のぬににほひて咲けるふぢはかまをりておくら  
むその人なしも  
かくばかりありけるものを世の中になにあさかほ  
をもろしとおもはむ  
あはれさはいつはあれさも秋のよはむしのなくね  
に八千くさの花

思ひつつ来てぞききつるこよひしもこゑをつくし  
て鳴けきりくす  
今よりは千くさはうゑじきりくす汝がなくこゑ  
のいともうきに  
秋山にさきたる花をかそへつつこれのどほそにた  
ごり來にけり  
秋のぬにくさ葉おしなみ來しわれを人などがめそ  
香にはしむとも  
のどろかにわか來しものを秋のぬの花に心をつく  
しつるかも

ここのべにしをりやせましひさかたのまた來むあ  
きはたづねこむため  
いつはとは時はあれどもさひしさはむしの鳴く音  
にのへの草花  
秋もやや衣手さむくなりけりつづれさせてふむ  
しの告くれば  
秋もやや夜さむになりぬわか門につつれさせてふ  
むしのこゑする  
秋のぬの花のにしきの(又)にしきにつゆけしやうら  
やましくもやとる月かけ

〇月よみの光をまちてかへりませ山路はくりのいが  
のおほきに(首二定珍との贈答歌)  
月よみの光をまちてかへりませ君かいへちはとほ  
からなくに  
月ゆきはいつはあれどもぬは玉のけふのこよひに  
なほしかずけり  
いざうたへわれたちまはむぬば玉のこよひの月に  
いねらるべしや  
風はきよし月はさやけしいさともにをどり明さむ  
おいのなごりに

いく人かえもねざるらむあしひ木の山の端いつる  
月を見むとて  
名にしおふこよひの月をわがいはにみやこの君の  
ながむらむとは  
旅ころもさひしさふかき山里にくもるおなしき月  
を見るかな  
えにしあればとせつつきこのとに名たたる月  
をなかむらむとは  
白たへのころも手さむし秋のよの月なか空にすみ  
わたるかも(真心尼におくりしうた)

ふる雨に月のかつらもそまるとや仰けは高しなか  
月のそら  
秋のよの月のひかりのさやけさにたどりつつ來し  
きみかどほそに  
わたつみの青うなはらは久方のつきのみわたると  
ころなりけり  
あしひ木の國上の山のまつかけにあらはれいつる  
月のさやけさ  
あきはぎのちりもすぎなはさをしかのふしとあれ  
ぬとおもふらむかも

あきはぎのちりのまがひにさをしかのこゑのかぎ  
りをふり立ててなく  
ゆふつくよひとりどほそにききぬれはしくれにさ  
そふさをしかの聲  
秋さらはたつねて來ませわかいほををのへのしか  
のこゑききがてに  
このゆふへねさめてきけばさをしかの聲のかきり  
をふりたててなく  
なかきよにねさめてきけはひさかたのしぐれにさ  
そふ(又、しくれのさそふ)さをしかのこゑ



さよふけて聞けば高ねにさをしかのこゑのかきり  
をふりたててなく  
秋もややのこりすくなになりぬれはよなくこひ  
しさをしかのこゑ  
ももくさのみたれてさける秋のぬにしからみふせ  
て(又、ふして)さをしかのなく  
ゆふきりにをちのさとへはうつもれぬ杉たつやと  
にかへるさの道  
さひしさに草のいほりを出でて見れはいなばうこ  
かしあき風そふく

ともよばふかご田のかりのこゑきけはひとりやさ  
ひしものやおもはる  
こよひしもねさめにきけはあまつ雁雲居はるかに  
うちつれて行く  
いつまでもわが忘れめやかな月のきくのさかりに  
たつねあひしを  
わかやどのまかきがもとの菊の花このころもはや  
さきやしぬらむ  
来て見ればわかふるさとはあれにけりにはもまか  
きもおち葉のみして

おく露にこころはなきをもみち葉のうすきもこき  
もおのがさまく  
みどりなるひとつわか葉を春は見しあきはいろい  
ろにもみちけるかも  
わか宿をたつねて來ませあしひ木の山のもみちを  
たをりがてらに(二首定珍に)  
おく山のもみちふみわけことさらに來ませる君を  
いかにどかせむ  
もちはのふりどふりしくやごなれはどひこむ人も  
みちまどふらし

うちつけてちりなはをしきもみち葉を見つつしぬ  
はむ秋のかたみに  
もみち葉はちりはてぬとも(散りすくるとも)谷川に  
かげだにのこせあきのかたみに  
あき山をわがこえくれはたまほこの道もてるまで  
もみちしにけり  
ひさかたのしくれの雨のまなくふれはみねのもみ  
ち葉ちりすぎにけり  
あしひきの山のもみちはちりすぎてうら淋しくも  
なりにけるかも

十日あまりはやくありせはあしひ木の山のもみち  
をみせましものを(以下二首定珍に)  
もみちはの散りにし人のおもかけをわすれで君が  
とふぞうれしき  
わかやどのまかきにうゑしつたかつらこのつきこ  
ろはもみちしぬらむ  
山里はうらさひしくそなりにけり木々のこすゑの  
ちりゆく見れは  
すみ染の衣手さむしあき風に木の葉ちりくるゆふ  
くれの空

こよひあひあすは山ぢをへたてなばひとりやすま  
むもとのいほりに  
なみくのわがみならねばすべをなみたまさかに  
來し君をかへせし  
うちはへてたた一すぢのふる道をふまんふまじは  
君がまに  
足ひ木の岩まつがねにうたげしてかたるその日を  
いつかわすれむ  
さす竹の君がすゝむるうまさけにわれゑひにけり  
そのうま酒に

さす竹の君がすゝむるうま酒をさらにやのまんそ  
のたち酒を  
よしあしのなにはのことはさもあらばあれどもに  
つくさむ一つきの酒  
うま酒にさかなもてこよいつもく草のいほりに  
宿はかさまし

うま酒をたぶ、何酒さへばくびき酒といふを句の頭におき

くりのおつひにもぞ君はきますなるさこそはわも  
へけだしいかゝあらむ

ませの浦のあまのかるものよりくに君もとひこ  
よ我もまちなむ  
露おきぬ山ぢは寒し立ち酒ををしてかへらむけだ  
しいかゝあらむ

□

あすよりの後のよすがはいざ知らず今日のひと日  
はゑひにけらしも(以下二首由之に)  
うまさけをのみくらしけりはらかなの眉しろたへ  
に雪のふるまで